

それは悲痛の叫びであつた。最後尾は涙に消されて分らなかつた。啜泣の聲が闇に洩れた。興奮した哲雄の心は悲みに一杯になつた。けれども一種の快感を覺えた。

「何うして泣いてばかり居るんです。泣いてゐては分りません。何うしたのです」

「お別れです。お別れでございます」

彼女の聲は又暫くとぎれたが、やがて續けていつた。

「まあ聞いて下さい。妾あれから、じつと家に居ました。何となく不安な思で。すると夜八時頃父は金貸と泥水家業の男とを連れて來ました。そして妾はせめられました。妾は反對して見ました。妾は何うしても彼等と口をきくのさへいやでございますから、妾はかう云つてやりましたのよ。

『妾は人間でございます、相當に教育された人間でございます。私は品物ではありません。お歸り下さい』妾はかう云つてやつたとき『もうもう何んな事があつたつて此人達に口を交すまい』としました。けれども、其人は非常に怒つて、かう云ひました。『生意氣な事を云ふか。そんな事を言つたら何んな事になるかをお前さんは知つてゐるか。俺はお前さんの父に五百兩の金を貸してあるんだぞ。それに期限はもう切れてゐるではないか。俺がお前さんの父を牢に入れるも入れないも俺の勝

手だ。お前さんは父を牢に入れてもそれでいいと思つてゐるのか。え、お前さん、何もお前さんに操まで賣れと云ひはしない。時間を定めてその間だけ客の前に出て、機嫌さへ取つて呉れ、ばそれでいい。何もお前さんに苦勞な事をさせやうと云ふのじやない。かへつてお前さんの今よりいいじやないか。それに、父はお前さんの爲に助るではないか。して見れば一舉兩得と云ふものだ。お前さんが親孝行にならうと云ふなら樂なのだ。何うだ。返事して呉れ』けれど妾は黙つてゐました。いくら言葉上手に説いたつて妾何うして聞きませう。一二時間の間は争つてゐました。すると二人は怒つて立上りました。『お前の父を見るが可ひ。俺はこれから告訴するから』『何うでもするがいい』と妾は決心しました。けれども、けれどもまあ何と云ふ父でせう。父は妾を打ちました。妾は一生忘れません。父、父、何と云ふものでせうか。そしてかう云ひました。『此剛情女奴、俺を牢に入れやうとするか、親不孝奴』すると妾はあゝ此れ程無念であつた時はありません。妾父に打たれながらかう思ひました、『家に居たつて仕方がない。父は妾を愛して呉れない。身を賣るとは云ふものゝ操まで賣るのではないのですから』妾はかう云ひました。『妾は行きます!!』けれども妾、一生忘れません。妾は父を呪ひます。何うして忘れられるものでせうか。妾は父を憎んで、憎んで、憎



み抜きます」

彼女はかう云つて、息を入れて語り出した。

「妾父を憎むと云ひました、え、憎みます。けれども妾は父を愛してゐます。愛してゐる事は事實です。憎んでゐる事も事實です。妾は一生つまり父を愛しながら憎みます。さうです、妾は愛しながら憎む事が出来ます。妾の今の立場を理解して下さいませうか」

「え、理解します。私は理解します」

「理解して下さいませうか、妾嬢うござんす。けれども、現在の立場として妾のする行爲、妾のする行爲はこれより外はないと思ひますが、有つたら、いえ、妾はもう何も云はなくてもよいと思ひますわ」

さよ子は黙つてしまつた。

「何うしたと云ふのですか」と哲雄は聞いた。

すると不思議な感動が彼女の全身を振るはすのを感じた。

「妾」彼女はかう云つた。

「え」

「妾を愛して呉れますか。妾があちらへ行きましても」

「愛しますとも!!」

哲雄はかう叫ぶと彼女の手を取つた。彼女の手は熱かつた。

「愛してゐます。愛してゐますよ」哲雄は重ねて言つた。

「私は、私は何んなに貴方を愛してゐるかを貴方は知らないでせう。いや、知りません。貴方は私の思つてゐる百分の一も知りません。私は貴方を絶対に愛してゐます。貴方は私の凡てです。さうです、私の生命です。私は貴方の如何なる行爲も許します。さうです、如何なる行爲でもたとへ貴方が殺人犯でも私は愛すでありませう。そして如何なる敵とも戦ひます。貴方の爲なら生命さへ捧げます」

哲雄の聲は顫へて來た。

「けれども現在に於て貴方の境遇を救ふと云ふ事が私に出来ない」と云ふ事が残念です。けれど、私



は必ず近い内に一箇の獨立した人間となつて、貴方を救ひます」  
かう云つた時に哲雄の心中にはむらくと憤怒が起つた。

「何と云ふ馬鹿な男でせう。私はつまらない事を云ひました。私が貴方を救ふ事が出来ない？ いや出来ません、出来ません、何んな事でも出来ません。何んな事でも私は貴方の命令通になります。何んな事でも、さあ、命令して下さい。」

「さあ、何んな事でも。人を殺せと云へば私は殺します。自殺しろと云へば自殺もします。私は愛してゐます。愛してゐます。これ程愛してゐるのです」

哲雄はもう云ふ事が出来なかつた。兩眼には熱涙が浮かんだ。彼女は黙つて闇の中にぶる／＼身を振るはせて泣いてゐた。

「さよ子さん。私の生命を要求しますか。私に連れて逃げろと云ふのですか。一緒に死んで呉れと云ふのですか。え、何うです」

すると彼女は、かすかな叫聲を上げて、哲雄の手に縋りついた。

「妾を苦しめて下さいますな。妾は苦しいのです。妾は嬉しいのです。私は貴郎を愛してゐます。愛

してゐますわ」

かう云つて、彼女は近く進み寄つた。女性の肉體から出る力は哲雄の心臓を刺した。彼女の快い芳香と髪の毛は哲雄の顔にさわつた。深い深い溜め息は彼女の唇から洩れて來た。哲雄は強くその息を吸つた。と不思議な情火が身體全體に飛び散つた。哲雄の手は無意識に彼女の脊に廻つた。そして彼女を抱きしめた。

「妾死んでもようござんすわ」

彼女は囁くやうに云つた。

すると哲雄の全身にはむらくとある力が起つた。じつと彼女を抱きしめながら、哲雄はかう云つた。

「私と死んで下さい」

哲雄は彼女の躍るやうな心臓の鼓動を聞いた。哲雄の心は恍惚として、宇宙凡ての天外にさまよつた。哲雄の唇は燃えるやうな彼女の唇を強く強く接吻した。

\*

\*

\*

\*

\*



何時間経つたらうか、二人の魂は恍惚の中に天外をさまよつた。ふと我に返つた時、哲雄は彼女を抱へてゐた。彼女との息は長くなり。彼女の心はぐつたりつかれてゐた。そして、そして、一種の安堵と恍惚とを感じた。

「さよ子さん」

哲雄は靜かに云つた。

「え」

「永久に此の夜を忘れないやうにね」

「えい永久に忘れませんわ」

その時一匹の螢が光つて過ぎて行つた。

「美しい夜ですわ。楽しい夜ですわ」

さよ子は云つた。

「けれども妾何うしたら良いでせうか。いえ、妾は行きませう、哲雄さん。けれども妾を愛して下さい。妾は決して墮落するやうな事はありませんの。そこは腐敗の巷でせう。そこは人生のどん底

でせう。そこは悲惨な所でせう。けれどもね、妾はその泥水の中にきつと美しく咲きますわ。きつときつとあの白蓮のやうにね。あらゆる逆境と淫風の中にきつと咲いて見せますわ。

「哲雄さん何うぞ勉強して下さい。妾は貴方の成功を祈ります。その方がいゝでせう。さうして下さい。今死んだつて仕方がありません。またいつか未來に助かる事があるでせうから、お互に強く生きてさへ行けばいつかは幸運になりますわ。人生はそれは辛いものですが、行つれば又光明に向ふ道があるでせうから。妾は貴方の外誰をも愛しません。妾は貴方から愛されさへすればそれで満足ですわ。それで満足ですわ。貴方は妾を愛して呉れます。妾は貴方から愛されさへすれ呉れます。けれども私は貴方の進む道を、學業を防げる事はしたくありません。そんな事が何うして、何うして出来るものでせうか。進んで下さい。お互にね、妾は決して墮落なんかしませんわ。そして貴女の成功を祈つてゐますわ」

かう云つて彼女は靜かに、靜かに啜り泣いた。

哲雄は靜かに彼女の脊をさすりながらかう云つた。

「我愛する人よ、私は貴方を愛してゐます。何うか忘れて呉れないやうに、ね、僕はいつまでも貴



方を愛してゐます。私は、貴方から存分の報ひを受けました。けれども、私は現在貴方を救ふ事が出来ません。けれども、それは永い間ではありません。僅か二三年の間ですから、何うか、その間待つてゐて下さい。そして、私達は家庭を作りませう。

「私の生命は貴方に捧けてあります。何時でも有用な時には私の生命を捧けます。僕は奮勵します。あらゆる正義の爲に、そして疑問の解決のために、ね、さよ子さん、僕を愛して下さい。愛して下さい。」

「妾も愛して下さい。妾は何んな苦痛でも耐へ忍びます」かう云つて彼女は哲雄の手を握つたがその手は闇の中に涙にぬれてゐた。

「妾は行きます、さよなら、哲雄さん。妾の未來の良人」

彼女はかう云つて哲雄から離れた。

「ちよつと待つて下さい」哲雄はかう云つた。

「ね、いつまでも愛して下さい」かう云つて哲雄は彼女の頬に接吻した。

「さよなら」哲雄はかう云つたが、彼女は去らなかつた。暫くの間じつとしてゐた。

「妾は行きます」と彼女は云つたが、もう云ふ事が出来なかつた。哲雄の心は裂かれるやうであつた。じつと彼女の手を握つてゐた。幾分間か過ぎた。

突然彼女はふと驚いたやうに頭を上げて哲雄の頬を接吻した。そして、握られた手を振離すやいなや飛ぶやうに闇に消えた。

「さよ子さん、」哲雄はかう叫んだが、彼女の姿は闇の中に消えた。

耐へ難い悲哀が哲雄の心臓をかきむしる。彼は急にぐらぐらとめまいがすると、よろ／＼とよろめいてはつたりそこに仆れてしまつた。

「我愛する人よ」

彼は闇の中に草をかきむしりながら叫んだ。

「我愛するさよ子さん。永久に健全なやうに」

彼の體はぐつたり疲れて來た。悲哀は一種の快感さへ引き起した。うつとりしてゐると、急に彼の身體はぶる／＼と顫へて來た。それは神經の熱の發作であつた。彼はそこに二三時間／＼と眠つてしまつた。



翌日彼は起上る事が出来なかつた。高度の熱が出た。其翌日もぐつたりと疲れてゐた。四五日の間は外出する事が出来なかつた。

## (五)

大正×年十月の中頃、東京に哲雄は居た。

彼女と別れてから早二ヶ月の月日は経つてしまつた。

二ヶ月の間に彼の心身が如何に變つた事であらう。

彼は新宿の停車場附近に宿を取つてゐた。下宿は小路の薄暗い三疊の間であつた。そこは素人下宿で、變な家であつた。

彼は以前には東京の中心に近い、繁華な便利のよい處に下宿してゐただけけれども、彼の性質の變化、彼が淋みを愛し、より以上に孤獨を愛するやうになつてからはその陽氣な下宿が氣に入らなかつたので、こゝへ引越して來た。

以前の下宿のそばには劇場もあつたし、それから同じ宿に同じW大學生もゐたつた。彼の友、村

上は陽氣な親切深い勉強家の青年であつた。哲雄は以前から孤獨であつたので、友と云へば、熊谷と此の村上の位なものであつた。哲雄は誰とも交際を殆んどしなかつた。そして必要以外の事については一口も云はなかつたので、同じ同窓の人々は彼を變人と呼んでゐた。けれども此の村上だけは哲雄を信用した。

「他人は君を變人などと言ふけれどもね、僕は君を尊敬してゐる。そして愛してゐる。僕はね、君の親友だよ。勉強し給へ。そして運動し給へ」と村上は云ふのだつた。村上のやうな陽氣な青年が何うして黙り屋の哲雄を愛してゐたかは不思議であつた。哲雄は村上に對して好意は持つてゐたが村上が彼に何うしてかう味方するかは不思議な位であつた。哲雄はじつと黙つて何事をか考へてゐるのが癖であつた。そして村上が最も熱心に彼を慰め、力附ける時でさへ彼は祿な笑顔さへも見せなかつた。最初の内の一二語はそれでも力の無い返事をするけれども、しまひには急に黙り込んで悲しさうな顔をしてしまふのであつた。そして、それ以上話かけると、憤つてしまふのであつた。

所が、夏休みに哲雄が家へ歸つて來てからと云ふものは一層その様子が變になつて來た。

下宿を更へるその朝の事だ。村上が目を見て見ると、同室の向側に居た哲雄は青白い顔をして



静かに荷物を片つけてゐるのであつた。村上は驚いて叫んだ。

「何うすると云ふのだね、君は」

哲雄ははつと此方を向いたが、又目を下に落して先方に向いて、黙つてしまつた。

「何うするんだね、え、小口君」村上は重ねて聞いた。すると哲雄は、

「下宿を更へるんだよ」

かう答えた。

「下宿を、何うして變へるんだ。僕が何か君に對して悪意でも持たせたのか。又は場處が氣に入らないのか。或は下宿の主人が氣に入らないのか、……………」

「下宿を更へる事は勝手だがね。何うしてそんなに急に思立つたやうな事をするんだ。何うして君は僕に相談しないんだ。小口君、僕は君の親友じゃないか」

すると哲雄はかう下を向きながら云つた。

「いや、僕は君に對して悪意を持つてゐるのではない。此の下宿の人達がいやなのじゃないよ。たゞね、僕は淋しい處が好きなんだ。狐獨な處が好きなんだ」

「又君の狐獨か。何だ面白くもない。近頃君の様子は變だよ。まあそんな淋しい事は云はなくてさ、僕と一緒に此處に居給へ」

さう云つて、村上は食事が済むと學校へ出た。けれども歸つて來た時は哲雄はもうそこには居なかつた。

十月一日の朝、哲雄は眠から覺めた時にはもう遅かつた。不愉快な夢からさめた時、睡眠から現實に歸るときの不快な氣分で軽い頭痛を伴つてふと眠からさめた。

太陽は東の窓、小さな蜘蛛の巣だらけの、幾月にも掃除をしてない窓からにぶい光線を送つてほんやりと室内を照らしてゐた。都會のどやくした、何とも云へない空氣の動搖は彼の觸感に波打つた。外はどんよりと曇つて、灰色の空がちよいくと覗いてゐた。

「何といふ不愉快さであらう。さうだ、自分は此處にゐる。此處は不潔だけれども、自分は此處を望んで來たのだ。此處はごたく家の並んだ貧民窟だ。食物が悪い。空氣も悪い。だがそんな事が自分に取つて何だ。此處にはつまらない人間ばかりうよくと團つてゐる。だがそんな事が自分に



取つて何だ」

ときり／＼と頭痛を覺えた。

「自分は病身だ。自分の頭腦は疲れてゐる。だが、何と云ふ不満、そして苦みだ。俺は不満な人間だ。疑ふ人間だ。疑ふ人間だ。空想する人間だ。忘想する人間だ。死ぬ事を怖れぬ人間だ。死だ。死だ。死だぞ。自分は、何うしたつて考へる、いや考へさせられるのだ。何物とも知れない偉大な力が自分に考へさせるのだ。だが、もう自分は考へる力さへ無くなつたやうだ。力を落したものはさうだ愛人との別離だ。我愛する彼女との別離だ」

此處まで考へた時、彼は無意識に立上つた。そして石鹼を持つて外へ出た。

顔を洗つて來たが、何うしても清々した氣分にはなれなかつた。

「いやだ。今日も學校へは行くまい。もう一週間も續けて休んでゐる。學校がなんだ。學校は何を自分に教へてゐるのだ。幸福ならんが爲め、人類の生活をより以上に幸福ならしめんが爲の學問ではないか。苦しい人生の疑の雲を晴さんが爲の學問ではないか。學問の爲すべき事は此處にある。然るに學校は何んだ。彼等が果してそれを知つてゐるか。彼等は教育といふ職業を初めてゐるんだ。

彼等教育者は教壇の上に立つて何を云つてゐるか。彼等は理屈家だ。理屈を云ふ事はうまい。そして人眞似が巧者だ。彼等は何も知らない。いや、知つてゐるものは極く少ない。殆んど十人に九人迄は何も知つてゐない。

「彼等は暗記力は強い。暗記力の天才だ。先代に於ける人間の苦心に苦心を重ねて見出した發明を三十分位で暗記してしまふ。それを理解してゐても居なくても要するによいのだ。たゞ、如何に短時間と最小の勞力を持つて生徒に教授すべきかを考へてゐる。彼等は、いや彼等はそれでよい、それでよい、争ふに足る程の者では無い。第一教育と云ふものが根本から妙なものだ。彼等は何と云ふ。『世の中に於て教育程神聖なものはない』と云ふのであらう。けれども、彼等は人間、個人と云ふものを知つてゐるか。そして自分と言ふものが解つてゐるか。眞の自分と云ふものが解つてゐるだらうか。自己は自己である。個人は個人である。人々は同じ道を歩む可きものではない。天性的に新しい道を通つて行くものである。それは自然だ。自然は貴い。それなのに彼等は自分が基督や佛陀のやうな氣分で生徒に教へてゐる。古來大人物は決して他人の爲に生きたのではない。教育に依つて成長したのでは無い。彼等は獨創だ。それなのに彼等は生徒にかゝるものであると斷定



的に教へ込む。幾多の天才の血を絞つて造り出した學理を少しの苦みもしないで機械的に生徒に教へる。教へ方は強制的だ。そして生徒の先天的の性質を理解してゐない。さうだ。かゝる教へ方は生徒を生かすものにあらずして殺すものだ。

「それから、その教へる事は何だ。やれ代數だ。幾何だ。物理だ。化學だ。それから驚くべき事は修身まで教へてゐる。何の事だ。そんなものを研究した處で何うなるものか。何うして彼等は生といふ大實在、死と云ふ大實在に驚かないであらう。そんな枝葉の事で何を苦しんでゐるのであるか」

かう考へてゐるときふと衣摺れの音がして、戸が開いた。

「御飯で御坐います」

と、若い女の聲がして、宿のみち子が現れた。

最初哲雄の視覺に映じたものは彼女のでぶくと脂切つた手であつた。ほつくりと脹らんだ、よく戀愛期の少女に特有な曲線である。彼女はその手に膳を持つてゐた。坐つた彼女は膳を前に出した。

「お上りなさい」

かう彼女は云つて、じつと哲雄の顔を見つめた。哲雄が目を上けると、彼女の視線とびたりと合つた。赤ら顔の彼女の頬と彼女の焦けた目は不思議に男性の肉感をそゝつた。彼女の顔は上品ではなかつた。でぶくとふくれた赤い頬、眞赤な厚い唇、そして髪は不思議な結い方をしてゐた。頸元までべたべたとつけた白粉と、肉感的な眼つきとは賣笑婦を思ひ出させた。彼女はじつと哲雄の顔を見つめてゐた。

哲雄の前には、赤塗の膳と盛り上げられた飯と味噌の流動してゐる濁つた汁と、それに、乾物とが添へてあつた。

哲雄はじつとそれを見てゐると、一種の臭氣が鼻を衝いてむかむかときみ上げて來た。箸を取る事が出来なかつた。

哲雄が目を再び上げて見ると彼女はまだ哲雄を見つめてゐた。そして、一種の卑劣な笑ひ方をした。哲雄の心には忽ち強い憤怒が燃え上つた。

「下けて呉れ、今日は食べないよ」



すると彼女はふつと態度を變へて云つた。

「何うかしたんですか、御氣分でもお悪いの」

「いや何でもいゝよ。早く下けて呉れ」

すると彼女は黙つて膳を持つて出て行つた。その唇には反抗の色があつた。

哲雄はぐつと不快になつた。

「何んといふ奴だ。自分は彼女の顔を見る度に不快になる。醜さを感じる。だが彼女程肉感的な奴はない。彼女の焦けた腫、腐爛した肉は自分の肉感を野獸の様に挑發させる。不快だ。不快だ」

哲雄は無意識に立上つて帽子を取るとぶらりと外へ出た。

外は暑かつた。そこは人生の争闘の巷であつた。そしてそこは歡樂の巷でもあつた。悲哀の巷でもあれば、歡喜の巷でもあつた。成功の巷でもあれば、失敗の巷でもあつた。向上の巷でもあれば墮落の巷でもあつた。空氣は濁つてゐた。あらゆる病菌は埃の中を舞つてゐた。

哲雄は頭にかすかな痛みを覺えながら通る人々に對してじつと注意して歩いた。

うねりうねつた小路を歩くといやな煮物の匂が鼻を衝いた。そしてその料理屋の門には白粉を

べたべた塗つた下女が立つてゐた。ガラ／＼と車を引いた商人が通つた。學生が通つた。足の細い女學生が通つた。官吏が通つた。凡ての人々が彼に取つては嫌惡の情を起させた。そして、何もかもぐる／＼と廻轉してゐるやうに見えた。

幾町も幾町も歩き廻つた。目は汗の爲に赤くなり、暗くなつて來た。頭はぐん／＼として熱があつた。ぞつとした惡感が脊中を駆けずり廻つた。

かうした状態、かうした惡感に苦められて居る内に哲雄は次第に神秘的な氣分に包まれて來た。それは彼が度々感ずる事で、今までの惡感に超越し或る一種の精神界に入るのである。それはあらゆる感情の極度である。苦痛の極度、落膽の極度、悲哀の極度、凡てはその極度に達すれば苦痛は苦痛でなくなり、落膽は落膽でなくなり、悲哀は悲哀でなくなり、凡てが一様に一種の神秘的恍惚状態に入るのである。かゝる状態、期待するやうな、次に何か來る可きものを期待するやうな氣分に包れて哲雄は歩いた。

此の時ふと彼方から出て來た一人の老人が有つた。年の頃六七十にもならう、髪の毛は半白ではうほうとして丈は高く、ひよろ／＼と瘡せてゐた。ほろ／＼になつた袴を着て足には古い靴を履



いてゐた。哲雄が第一に目のついたのは老人の力無きどんよりとした眼であつた。老人の顔は瘠せて、無氣力なその目は何物をも見てゐないやうであつた。唯前方に向いてすすつと歩いて行く。哲雄が神秘的な氣分に包まれて何物をか期待してゐたといふその期待したものはそれであるらしいかつた。何故と云へばその老人に行會つたとき哲雄は思はず立止る程強い或力を感じたからである。あれ程大勢の人間、幾種類かの人間に行會つても何の興味も覺えなかつた彼が、思はず立止つたのである。哲雄がじつとその老人を見つめてゐると、不思議な煙のやうな或氣體がそのむさ苦しい老人の身體に輪を畫いてゐるやうに見えた。それは水中の輪波のやうなものであつた。

老人は哲雄には少しの注意も拂はずに、不格構な足取、今にも坐つてしまひそうな足取で、哲雄の側を通り過ぎて行つた。哲雄は立止つてその老人を見つめてゐるが、やがて或引力の爲に引かれるやうにその老人の跡をついて行つた。何故哲雄がその老人の跡をつけたか、それは不思議な事であつた。恐らく彼自身でも説明する事は出来なかつたであらう。けれどもその時は何等の不合理も無く、極めて、當然の事のやうに思はれたのである。これが機會といふものであらう。機會は理屈では無い。それは殆ど推測しられない短い瞬間に捕へるものである。

哲雄はじつと老人の後をついて行つた。晝頃であつたらう、太陽は強く強く下界を照してゐた。老人はごたくした露路の中を殆んど何者も注意を引かないやうに、いや、注意する氣力の無いやうに歩いて行つた。靴、ほろ／＼になつた靴と素足とが目についた。ちつと小路を通つて、衝き當ると又左へ折れて、相變らず歩いて行く。哲雄はその老人と凡そ二十間の距離を保つて歩いて行つた。朝から飯を食べない哲雄はぐつたりとつかれてしまつた。だが一種の神秘的な歡樂の中に彼は在つた。

二三十分は歩いたであらう。老人はその電柱の前に立止まつた。哲雄は注意して彼を見た。老人はぐつたりと疲れたらしく、その細い毛だらけの足を止めて電柱に據り懸かつた。じつと四邊をそのどんよりとした目で見廻して、手をだらりと下に垂れた。そして眼を閉ぢた。

哲雄も又立止まつて老人の顔を見つめたが、心臓のぎくりとする位、深い恐怖を覺えた。何故、見よ老人の顔は生きてゐる人のやうでは無かつた。青い、血の毛の無い顔では無いか。かゝる人間が生存してゐる可きはすが無い。哲雄ははつと驚いて目を伏せたが、再び恐る恐る眼を上げて見た。すると今度は銅色の、血の氣のある、老人の顔であつた。錯覺であつたらうか。それは恐らく哲雄



の錯覺、病的に疲れた彼の錯覺であつたらう。けれども哲雄はその瞬間に極めて熱心であつた。眞正面からじつと見つめた事を確信する。それだけで此老人についての事件が終つたならば、哲雄の恐怖もそれ程では然かつたであらうし、又此の瞬間に於ける老人の不氣味な顔色も彼の一時の錯覺であつたと思つたかも知れないが、次には又より以上に彼を驚かす可きものが待つてゐたのである。

凡そ十分間ばかりも老人は柱に靠たれてゐたが、やがてそのつぶつたほんやりした目を開いてよろ／＼と歩み出した。哲雄も亦同じ距離を取つて引かれる様に歩いて行つた。哲雄は老人が電車通りに出たのを見た。老人は哲雄の前を又左に折れて歩いて行つた。電車は大勢の群集を乗せて走つて居た。自動車を通つた。凡てのものが空気を振動させて、不規則な音波を生じさせて歩いて行つた。

ふと、哲雄は何者かにつつかれたやうに感じた。抑へがたい恐れの爲に心臓は波打つた。何うしたのであらうか。じつと、彼はその老人を見つめると、老人の身は次第次第に薄くなつて行くやうに思はれた。やがて老人は四つ角へ來たとき、電車道を横切らうとして前へ出て行つた。哲雄は人

道に立つて老人を見つめた。老人の出た時、左の方三十間ばかりの處を自動車は疾走して來た。自動車はけたましく號筒を鳴らした。老人はよろ／＼と前によけやうとして出て行つた、眞に危い。間隔を置いて自動車は走つて行つたが、老人が避けてふら／＼と前に出ると、電車の軌道に躓いてばつたりと前にのめつた。と、右の方から來た電車はぐしやつと老人を轢き潰してしまつた。そして、二三間引摺つた。だが此の時間は、行れた時間は極めて短かつた。電車は止つた。人間は走つて行つた。

哲雄はがんと鐵槌で頭骨を粉碎されたやうに覺えてべたりと前に坐つてしまつた。

二三分の間はぐつたりと坐つたのみで、何等の思想も浮んで來なかつた。全くの空虚であつた。けれども電車の下から老人が引出された時、哲雄は自分が坐つてゐることに氣がついた。彼はよろ／＼と立上つた。そして老人の轢かれた場處へ行つて見た。

其處には引ちぎられた着物とべとべとした血の團りが砂に混つてゐた。老人は頭部をぐしやく／＼に潰されて居た。何處が目であるのか口であるのかさへちよつと分らなかつた。泥だらけの中に鼻が突起してゐた。そして、彼の手は切斷されて、ぶらりと皮のみで垂れて居た。



哲雄は永く見る事が出来なかつた。彼は強い感動を受けて、といふよりも病的に、其處を走り出した。

彼の目には殆ど何者も見えなかつた。彼は人道を前へ前へとあてども無く歩いて行つた。胸はその事で一杯であつた。

「死んだのだ」

哲雄はやう／＼胸から吐出すやうに呟いた。

「あの老人は死んだのだ。今死んでゐるんだ。それが一分間、いや一秒間前までは生きてゐたのだ。人間として扱はれ、目は見る事が出来、耳は音を聞き、頭脳は動いてゐたのだ。それが死んだ。今はもう云ふ事も出来ず、そして二三時間経つともう腐敗の悪臭を放つのだらう。何と云ふ事だ。え、何と云ふ事だ。え、何と云ふ事だ。世界に於て之程怖い事が有らうか。物理や數學を研究する學者は何故死といふ大實在を研究しないのだ。いや自分の考へで他人の事を考へて見ると云ふ事は悪い事だ。研究したくないものは研究しなくてもよい。けれども自分は何うすれば良いと云ふのだ。俺の心をぐんぐんと引張つて行くものは何んだ。俺の頭の中はくしゃく／＼してゐて何が何だか

分らない。世の中は神秘だ。俺は何故あの老人について來たのであつたか」

哲雄は心押し鎖めて考へて見た。

「何の理由が有つて自分は、自分は家を出た。と不快な氣分に太陽が俺を苦しめた。頭痛がした。それから、自分は何だか神秘的な歡喜の氣分に包まれた。すると、あの老人を見た。それから、いつの間にか自分はあの老人を追つた。何故、何故、自分はこの老人のみを追つたんだ。自分は今朝から幾百人、幾千人といふ人々に行會つてゐる。それなのに、自分があの老人のみを………。何が何だか分りやしない」

哲雄の頭腦の中を、思索の波が一過すると、彼の顔色は變り、彼の眼光は異様に光つた。それは何であつたか。かの老人が電柱に寄り懸つてゐた時のその恐しい顔色であつた。

「お、何と云ふ恐しい、青い顔色。どんよりとした、灰色の目。その顔色は一瞬にして過ぎ去つたのだが、その老人は今死んでゐる。して見ると、その顔色と次に來る死との間に何等かの聯絡がありさうだ。自分は信ずる。何と云ふ不思議な事であらう。そしてあの老人は自分より二十間先方を行つた。自動車の爲め危かつた。萬一にもあの自動車の速力が今少し早いか、又は老人の避け



方が遅かつたならば老人は自動車の爲に引殺されたであらう。危険な瞬間であつた。最も危い機會であつた。けれどもその次に来る可き機會を逃れる事が出来なかつた。老人はよろよろと仆れた。電車はそれを轢いた。之も機會の瞬間で有つた。それとも運命であつたらうか。老人は生れる時今月今日、何時何十分に此處で殺されると云ふ運命を先天的につけられてゐたのであらうか、いや自分の頭ではそれは分ら無い」

「それから」

哲雄は更に考へて見た。

「それから、自分が萬一、老人が何事も無く電車通を横切つた後、自分が其處をあの電車の走つた瞬間に横切つたらば自分は今どうなつて居るのであらうか………」

彼がかう思つた時目の前がぐら／＼として來た。

太陽の光線は強く彼の頭を照し、空腹の彼はへとへとに弱つて來た。

「俺は何處を歩いてゐるのか分らない。正氣が狂氣かさへ分らない。俺の頭は疲れてゐる」

彼はかう思ひながら氣の抜けたやうな足取りで歩いてゐた。胸にはかすかな痛みを感じた。

ぐら／＼として胸からは胃液がぐつとこみ上げて來た。哲雄はそれを吐き出した。足は脚氣患者のやうにほてつて前へ一步も進まなくなつた。

と彼は或人の呼聲を聞いた。

「小口君、小口君」

それは村上の聲であつた。

「どうしたんだね、その顔は生きた人間のやうじゃ無いぜ………」

それから後村上は何か云つたやうだつたが聞えなかつた。突然彼の目の前には切斷されてくしやくしやになつた頭部が現れた。ぶらりと垂れ下つた老人の腕が現れた。

哲雄は叫ばうとしたが、頭がぐん／＼と壓へられるやうな氣がすると全身がぶる／＼として氣を失つてしまつた。

彼が深い深い限りもない大海の底から次第に浮び出るやうな氣がして意識に返つた時、最初目に映つた印象はほつとした闇であつた。だが暫くするとそれは自分の部屋である事を意識した。自分



は床の上に寝てゐた。頭がしくしくと痛んでゐた。哲雄は又目を閉ぢた。すると、元氣な足音がして誰か入つて來た。哲雄が目を開くと其處には村上が立つて居た。

「哲雄君、氣がついたかね。しつかり爲給へ」

「いや、もう大した事は無いよ」

哲雄はかう答えた。

「心配したよ。すぐ醫者を呼ぶから」

「いや、その必要も無いよ。之でもう大丈夫だよ。僕病氣でも何でも無いんだよ」

「どうしたと云んだね。實際、僕驚いたよ。僕が學校から歸つて來ると先方に大分弱つて今にも仆れさうに歩いてゐる青年があつたから、誰だらうと思つてよく見ると君じゃ無いか。僕が呼ぶと君は仆れしまつたよ。それでも運よく見つけてよかつた」

村上は元氣づいて親友を救つたと云ふ歡喜から、ぱつと頬を赤らめながら云つた。

「たがね、君どうしたんだね。何か用でもあつたのかね。どうしてぶらついてゐたのだね」

「いや、僕かね」 哲雄は何と話してよいか判らなかつた。

「僕はね」

「どうしたんだね」

「不思議だよ」

「何を云つてゐるんだ。君やどうしたんだ」

「僕はね、まあ聞いて呉れ給へ。僕は不快だつたから學校は廢してね、外へ出たんだよ。すると一人の老人に行會つたんだよ。それからね、その老人について行くとその老人は電車で死んでしまつたのだよ」

「老人が死んだ。それは氣の毒だね。それで君がどうしたんだね」 村上は考へ込んだ。

哲雄は涙を浮かべながら急ぎ込んだ。

「不思議じゃ無いか、君、不思議だとは思はないか」

「君しつかりし給へ。そんな事は不思議でもなんでも無いよ。それは偶然なんだ。その老人が死ぬ時君が偶然にそれを見たと言ふだけなんだよ」

哲雄はすつかり昂奮して云つた。



「いや、不思議な事だよ。死と云ふ事が不思議でないかね。老人の死んだと云ふ事が」  
村上は驚いて云つた。

「まあさう急ぎ給ふな。君は熱病に罹かつてゐる。熱に浮されて居るんだ。まあ靜にしたまへ」  
哲雄はもう何も云ふ事が出来なかつた。堪へ難い悪寒は脊中を駆け回り、彼の舌はからくに干てゐた。彼は又あの熱病の夢中の状態に落入つて行つた。

## (六)

さよ子は哲雄と逢つたあの滅入るやうな、戀の國にさまよつた次の日父と共にM市のx町へ來た。

彼女が哲雄と別れた其夜はそつと自分の寢室へ入つた。けれども、彼女の胸は炎の如く燃えてゐた。女性の神秘的な魂は鐵の眞赤に焼けたやうにその網頂に達して、今にも彼女の身體を離れて空中に飛去るか、又は彼女の身體を焼き殺してしまふかのやうであつた。彼女は一晚中床の中でまんじりともせず、絶えずその曲線を振動させてゐた。それは戀するもの、凡ての動物の戀する時に於ける自然なる美、極度に昂奮した美であつた。

彼女はその夜、哲雄と戀したその夜、一種の靈感を感じた。それは何であつたか。言葉では云ひ表す事は出来ない。あらゆる美しき言葉、あらゆる美しき事物を持ち來つてもその靈感の百分の一も形容する事は出来ない。けれども強いて言ひ表さうとするならば、それは人類の創造時代を透視し、又數知らぬ先の世界を見出した時の歡喜とでも言はうか。

彼女の心は恰も深い、底知れぬ、大海の波動のやうであつた。熱烈な戀の炎は殆ど二人を焼き盡さんとし、それは又奔流の小さい葉を押し流すやうに彼女を戀の絶頂へ運んだけれども、彼女の心の奥底には計り知れない深い冷靜なる愛の泉があつた。

そして二人の戀は遂げられ、彼女は深い安心の中にあつた。それは深い安心であつた。限り知らぬ安心であつた。熱よりも強い涙の安心であつた。彼女は一晚中彼女の寢卷の袖がしつとりと濡れる位まで泣き通した。

夜明け頃になると、彼女の心は次第に冷靜になつて來たが、それは又、不安へと變つた。今日自分は何うしても己むを得ない境遇の爲に行かなければならない。そこには誘惑の惡魔が恐しい牙を



磨いて待つてゐると思つたとき、自己の魂の締めつけられるのを感じた。

夜は明けた。彼女は決心の内にその一日は過ぎ去つた。彼女はM市に來た。

彼女はM市の××町の小さな料理屋へ連れられて來た。そして二階の一室に案内された彼女は唯一人でぼんやりと過したが、膳は十一二才の少女が運んで來て呉れたばかりで、誰も訪問するものも無かつた。かうして第二日目は過ぎ去つた。

彼女は次第に不安の念に苦しめられ初めた。M市の夕方は靜かであつた。彼女は四疊の間に恰もその單調に苦しむ人の苦しさを感じてゐた。

彼女は深い深い淋みを覺えた。そして窓を開けた。外は早薄く星が輝てゐた。

「又夜になりました。私は夜が好きです。私は、私の境遇も夜ですもの。輝く星、美しい夜。」

彼女は細い絹糸のやうな聲でかう云つて見て、我と我聲に聞き惚れて、でも、少女らしく頬を赤らめて、淋みの中に淡い快樂を求めた。そして彼女の想念は靜やかに彼女の心を索つてゐたが、ふと何物かに解れると、忽ち彼女の血液は湧き初めた。

「我愛する人、私の可愛い人。私の神聖な人、私の勇敢な人。哲雄さん、妾は此處に居ます。哲雄

さん、行會ひ度いのです。けれどもね、私境遇と戦ひます。あらゆる屈辱と戦ひます。妾は貴郎の前に純潔でゐます。妾、何ん事があつても妾の幸福の爲に、そして貴方の幸福の爲に戦ひます」

だが、彼女の顔色は段々と眞面目になつて來た。そして終には幾分かの悲哀さへ交つて來た。

「何うしたんでせうか」彼女は思つた。

「此處の人達は妾を何うしやうと思ふのでせうか。もう三日目ですのに何んとも云つて來ないのは此處の家の人は妾を何うしやうと云ふんでせう。妾はかういふ方面の事は少しも知らないけれど、何うも様子が變なのよ」

さう思ふと何だが行手が暗膽たるものであつて、計り知られない危害が待つてゐるやうな氣分に包れて、より以上に悲みが増すのであつた。

彼女の想念は美しい、純な、そして幸福であつた過去の少女時代の追憶に耽けつた。

彼女は子供の時は幸福であつた。夢のやうな幸福な時代、それは遠い遠い過去の事であつた。彼女の幼年時代、彼女は美しい山脈の麓の富裕な家に生れた。そして彼女はなつかしい母親の姿を思ひ出して見た。底知れぬ大きな情に満ちた、その目、その眞白い齒、笑ふ時には大きな白蠟のやう



な白い八重歯を出した母、彼女の幼い顔をじつと見つめて、そしてたまらないやうに彼女を抱きしめて接吻して呉れたその母、その母の腕の中で嬉しさの爲にぶるぶる振へた幼年時代の思出。けれどもそれは夢であつた。美しい過去の夢であつた。美しい母はさよ子の丁度五歳の時に失くなつた。彼女の母は肺病で死んだ。

彼女は母の臨終の時を幻のやうに覚えてゐる。

母は座敷の薄團の上に寝てゐたつた。細い腕、真白い、青みが、つたその腕で彼女を抱いた。落窪んだ母の目は力無く光り、じつと彼女を抱いてそしてかう云つた。それは囁やくやうな細い聲であつた。けれども彼女の脳に深い深い記憶を残した。

「さよ子、お前は素なほに育つて呉れ。母はお前を守つてゐる………」

そう云つて母は泣いた。

そして、血を吐いて死んで行つた。さよ子はその前後は忘れてゐる。けれどもその場面だけはまざくと瞳の中に浮んで來た。

「お母さん」彼女は囁いた。

「永遠に眠つてゐるお母さん。妾は強く生きて行きます。運命は、運命の濁流は今妾を墮落の淵に押流さうとしてゐます。悪魔は妾を殺さうとしてゐます。けれども。御安心なさい。妾は素なほに生きて行きます。」

彼女は靜かにそのやはらかな手を合せた。そしてじつと暗黒を見つめた。晩夏の夕、星は光つてゐた。彼女の瞳からは涙が滲み出た。涙、それは暖い涙であつた。母親の愛を思ひ出す度に滲む懐かしい涙であつた。

母が死んでから父は事業に失敗し、そして、それが酒に身をもち崩す基であつた。

彼女が女學校へ入る頃は家は賣られ、父と共にM市に近い××村へ引越してゐた。

父はその時分一人の藝妓に迷ひ、兎角不在勝であつた。二晩も三晩も家に居ない事があつた。そして來る度毎に酒臭い息を吐いた。そして、彼女は泣き度い程の淺ましさを感じた。彼女は孤獨になつて行つた。

孤獨な悲み、その悲みに美しい花が咲いた。彼女は哲雄との戀に落ちたのである。

彼女が色々に過去の思出を繰返し繰返したとると、それは皆現在の悲しい境遇に繋がるのであつ



た。

かういふ思出の夢に耽けつてゐる時、後の戸は開いて一人の女、二十二三の色の白い化粧した女の聲がした。

「さよ子さん、女將さんがお呼びですよ」

彼女は深い冥想から呼び覺まされ、何事か不快な事の前に立つたやうに其の女の後について下へ降りた。

階下の八疊の火鉢の前には、三十五六、四十にもなると思はれる神さんが坐つて居た。

彼女の髪は抜け毛が多く、色は青黒く、艶を失つてゐた。その目は底光りがした。鼻は少し鉤なりであつた。

「まあそこへお坐り」

と、女將さんは嘆れ聲で云ひながら、煙管を取上げて吸ひ出した。彼女は一目見ると何とも云へない不快に包まれた。

「あの底光りのする氣味の悪い目は何を見てゐるのだらう。あの青黒い頭の中の頭腦は何を考へて

ゐるのだらう。そしてあの血の氣の失せた唇は今妾に何を云はうとしてゐるのだらう」

彼女はさう思ひながら其處へ坐つた。そしてお辭儀をした。さよ子のお辭儀に軽く答へて神さんは煙草を吸ひながら云ひ出した。

「今日からね、お前さんも私の家に来て呉れたわけだからそれはお前さんも承知の上だらうけれども私共の爲にね、働いて呉れなけりや。そんな事はお前さんも分つてゐるだらうけれど、成るだけ私の云ふ事を聞いてね。前から來てゐる人達も敬つてね、そしてやつてもらふやうに」

「え、それは覺悟してゐます。けれども妾何にも出來ませんの。三味線など一度も習つた事がないですもの」

さよ子は叔やかにかう云つた。

「いえ、そんな事は何うでも良ひのよ。自然に覺えるからね。だが、随分落度なくお客さま方の心持に反かないやうにね。つらい事も我慢してね、その處を随分耐へて呉れなけりやね。お前さんなどは他の人達より何れ程樂だか分らないんだからね。他の妓などは苦しい思ひをして藝も習い、大勢のお客さんの前に出なけりやならないけれども、お前さんなどはそれよりもずつと樂な方をや



つてもらふよ」

「有難う御座います。けれども妾何うしたらよいんでせう」

「何ね、つまりお前さんは一人の旦那の機嫌さへ取つて呉ればそれでいいんだよ。分つたらう。つまりお前さんを見込んだ一人の旦那、お金の澤山ある旦那があるんだよ。その旦那はね、お前が此處へ来る時から、その前からお前を見込んで居たんだよ。その旦那がね、お前さんの爲にお金を出して、つまりお前さんを抱へたのだよ。だからねお前さんはその御方の機嫌さへ取つて居ればそれで良いんだよ。ね、分つたらう？お前さんは随分幸福な人だよ」

けれどもさよ子の顔は段々不安になつて来た。

「悪魔だ。妾の貞操を踏みにじらうとしてゐる悪魔だ。お前を誘惑の淵に引込まうとしてゐる悪魔だ。けれども妾は決して墮落なんかしない」

彼女はかう思ひながら、

「え、妾は覺悟して来たのですから出来る丈の事はしますわ」

女將さんの顔には一種の卑劣な微笑が漂つた。

「あいさうかね。さう分つたらね、今夜は旦那がお呼びだからね、髪を結び直してね、衣物も着代へて、化粧してお出なさい。旦那は××屋にお出だからね」

さよ子はその旦那と云ふのが如何なる人物であるか聞き度かつたので、

「旦那と云ふのは一體誰でせうか」

「いやそんな事は行けば直ぐ分るよ。金のある、それは立派な旦那だよ。あゝ云ふ方の云ふ事を聞いておけば決して損にはならないよ。つまりね、お前さんの利益だよ。さあ、部屋へ上つて早く化粧しなさい」

女將さんは立上つて、

「歌ちゃん、さよ子さんの化粧を手傳つておやり。そして着物も出してね」

さよ子は、歌子の返事を歩きながら聞いた。そして彼女は二階へ上つた。

彼女が二階へ上つて見ると、はや鏡と化粧品が並べられてゐた。歌子は彼女の後へ来て彼女の髪を直し出した。さよ子はなつかしさうに名残り、處女時代の名残りの髪の毛のばらばらに崩されるのを見て居たつた。そして歌子に聞いた。



「歌ちゃん、妾何うしたら良いと云ふんでせうか。お神さんの云つた事は妾には十分了解出来ないの。お客を何うあしらつたら良いと云ふの」

すると歌子は妙な目で笑みながら答へた。

「譯はないじやありませんか。男の一人や二人。はいはいと云ふ事さへ聞いて、自由になつて居さへすれば」

「自由になるつて、無理な事を云ひ出したら」

「まあ、さよちゃん、初心ですね。無理なものないじやありませんか。此處ではそんな事當然ですわ。ちよつとでも好いてゐたら、それにお金になるんだから分けてもよいじやないの。好かない男だつてね、目をつぶつて居ればすぐですよ。それで了んでしまふじやありませんか」

さう云つてにやにや笑つた顔が鏡にうつつて醜かつた。さよ子の心にはむくむくと憤怒の情が起つて來た。その顔は青白く、口唇は何事かを云ひたけであつたけれども黙つてゐた。

「あゝ此の人も墮落してゐる。けれども妾だけは我戀人の爲に純な身體で居やう。必ず、必ず、死んでも身體は穢さない」とさよ子は心の中で決心した。

はでな衣物を着て化粧したさよ子の姿は美しかつた。

「まあ美しい事、これでは旦那の惚れたも無理はありませんわ。今夜は随分お楽しみ」

と歌子は笑ひながらさよ子の肩を叩いて云つた。

「お良や、さよ子姉さんを御案内し」

女將の刺のある聲がひびくと「あい」と返事をして十二三になる少女が現れた。それはさよ子に膳を運んで來たあの少女であつた。彼女の顔には血の氣がなかつた。彼女時代には林檎のやうな頬艶なのに、彼女の頬はごそごそして居た。頬は瘡せこけて青白く、目は神経質に猜疑と恐れとの爲におのゝいてゐた。さよ子は少女と共に外へ出た。

外には星が輝いて、哀れな此少女の姿を照らした。さよ子はじつと少女を見つめてゐた。少女は細い足でよろよろ歩いてゐた。そしてじつと黙つてゐた。さよ子は靜かに聞いて見た。

「お良ちゃん。お家は何處なの。此處の人の？」

「いゝえ、妾小さいときに養女に來たの。妾お父さんもお母さんも無いの。妾獨りつ切りよ、……」  
かう云つて少女はしくしく泣き出した。



さよ子の胸には同情の炎がむらむらと起つた。

「さう、でもね、これから妾が姉さんになつて上げるからね、心配しなくてもいいわ」

少女は黙つて、でも嬉さうに歩いてゐた。

す——つと町の通へ出て二町ばかり行つて薄汚いボール箱貼りや、青物屋のある角を曲ると、一軒の家の前に立つた。

「姉さん此處ですよ」

と少女は闇の中で手を舉げて、一軒の家を指した。

「あいさう。有難うね、もう歸つてもいいよ」

彼女がかう云ふと少女の影は動いて次第に細く闇の中へ消えて行つた。

じつと彼女がその家の前に立つてゐる時何となく胸騒ぎがして來た。彼女が二階を見上げると晃々たる電燈の光に映つて一人の男が坐つてゐた。

何と云ふ厭な事でせう。これからこんな男の機嫌を取らなければならない。そう思ふと「お前は固い決心をしなければならぬ」と誰やら囁くやうな氣がした。

「今晚は」

と彼女が思ひ切つて戸を開けると、

「まあ、××のさよちゃんですか。さあお上りなさい。二階にもう前から旦那が御待ちですよ」

と、四十五六にもならうと思はれる女が出て來て言つた。

彼女の心には何處までも自分を物品扱ひにしてゐるといふ憤怒と恥の感情が起つたがじつと耐らへて、

「有難う、遅くなりました」

と云ひながら上つた。そして梯子段を上つて行つた。

「誰であらうか。何んな風采な人間であらうか。商人か、それとも百姓か、老人か、若人か、何にしても立派な人であつて呉ればよい」かう云ふ考が彼女の昂奮した頭腦の中を駆けずり廻つた。彼女は戸の側に立つたがどうしても開ける事が出来なかつた。暫の間は探るやうにじつと中の様子を伺つてゐた。けれどもそれはどうしても開けねばならぬ事であると知ると彼女は非常な決斷を持つてするすると戸を開けて、



「今晚は御待遠さま」

と相手を見ずに頭を下けた。

彼女はじつと頭を上げて、それからそろそろと相手の顔をじつと見上げた。

彼女の顔は忽ち青白く引き締まり唇にはかすかな痙攣さへ起り、その眼光は憤怒の炎に燃え上つた。彼女の心臓は或は高く或は低く、一時は鼓動が停止したかと思はれる程であつた。彼女は思はずぐつたりと横に仆れやうとしたが、その身體を漸く左の手で支へた。

何者ぞ!!。彼女を失神する程驚かしめたのは何者ぞ!!

見よ、テーブルの前に坐り酒、肴を前にして、片手に酒を湛へた一杯の盃を持つて坐つてゐる男の顔を。でぶでぶ太つた赤ら顔。太く短かいその眉毛、底知れぬ残忍さを湛へたその血走つた眼、厚い強慾さうに結んだその唇。その唇の左にある大きな黒子。お、忘れやうとて忘れる事が出来やうか。

父の病氣の時巧言を持つて高利を貸し、數年間自分等親子の生血を啜り自分に身を賣らせたのは此の男では無いか。父を告訴すると強迫して自分の身を賣らせた男、高利貸、高山では無いか!!

彼女は激動を漸の事で抑へてゐた。

高山の強慾さうな唇は急に崩れて、強ひて笑つたその顔は卑劣であつた。高山は一杯ぐつと呑みながらさよ子の顔を見て言つた。

「やあ、さよ子さん。久し振りだね、どうだね、面白からう」

けれども彼女の青白い顔はきつと締まつて何とも言はなかつた。高山は彼女の容易ならぬその顔を見ると言葉を轉じた。

「いやまあ一杯御上り。そしてから又色々了解して貰はなけりやならない事もあるからね」

かう云ひながら太つた手で盃を出したが、彼女は取らなかつた。

「飲まない。さう嫌ひなら仕方が無いんだがね、まあ今夜はゆつくり話さう。そして私の云ふ事も了解して貰ひたい。私は何だかさよさんにだね、不了解な所が有ると思ふんだ。けれどもね、つまりね、さよさんは私がお前さん一家に對して爲た事にだね、了解しない點があると思ふんだよ。早く云へば何だか私に對して感情を害してゐるのだと思ふんだ。だがそれは誤解だ。了解しないからそれでさう云ふ風になつたんだね。お前さんが誤解してゐる事はだね、一家、お前さんの家が潰



れてしまつたのも、又お前さんが現在かう云ふ境遇にあると云ふ事もだね、皆私のした事のやうに思つてゐる。それでお前さんは怒つてゐるのだらう。けれどもよく考へてごらん、それはお前さんの誤解だと云ふ事は直ぐ分るんだ。あの時にお父さんが病氣だつた。その時私は困ると云ふから、時にどうしても入用だと云ふのだから、私も骨を折つて金を拵へて上げたのだ。萬一あの時に私が金を拵へなかつたら、とてもあの病氣は直らなかつたらう。して見ればだね、私が悪かないと云ふ事は分つたらう。私が悪いんぢやない。けれども私は決してさよ子さんが悪いと言ふんぢや無い。つまり、誤解したのだ。了解する事が出来なかつたのだ。誤解すると云ふ事は決して悪い事では無い。それは誰にでも有る事なのだ。私は決して悪いとは云はない。いや、私はお前さんの爲を思へばこそ、色々工面して無理な金も作つて上げたのだ。えい、分つたらうねえ」

けれども彼女はじつとこらへてゐた。

「偽者奴、悪黨奴。うまい事を云つてゐるが皆私に近づく手段だ」

彼女の心にかう囁くものが有つた。

高山は又一杯飲み干して語をついだ。

「それから、今度の事だ。今夜の事でもさよ子さんは苦しんだやうだが、その事で感情を害したやうだけれども、私としても強い出方をする事は厭であつたんだが、急に金の必要に迫られたものだから仕方が無かつた譯さ。それからね、お前さんに身を賣らせたのもね、此處をよく呑み込んで貰はなくちや困る。私は決してお前さんの不利を計つたんぢや無い。お前さんを大勢の男の前で弄ぶやうな事はさせはしない。墮落させやうと思ひはしない。………着物に欲しいものがあつたら買つても上げやう。何事によらず味方になつて上げやう。私はお前さんの味方だ。味方だ。だから、何でも希望するものが有つたら云つて呉れ。……」

高山がかう云ひ續けてゐる時、さよ子の胸は忽ち憤で燃え出した。「何と云ふ卑劣な言葉であらうか。物質で妾の身を自由にしやうと思つてゐる。」かう思ふと、とうとう彼女は堪へ切れなくなつて高山の言葉を遮つて言つた。

「貴方は何を云はうと思つてゐるのですか。それで妾をどうしやうと思つてゐるのですか」

彼女はじつと瞳を据えて、高山の顔を正面から睨みつけた。

高山の表情にはさつと残忍の色が浮んだが、それはほんの一瞬間で消え去つて、彼は大聲で笑ひ



出した。

二二八

「いや、お前さんのやうにさう怒つてしまつては話にならない。まだ誤解してゐるのかね。誤解して貰つては困る。そしてお前さんの利益にもならない事だ。此處をよく考へて見るが良い。だが私はお前さんを可愛いと思つてゐる。愛してゐるんだ。お前さんが無くては暮せないんだ。それ程私はお前を愛してゐるんだ。」

「妾を愛してゐる。そんな事が有り得ませうか。愛して下さいさうなくても良う御ざんす」

さよ子は激昂して叫んだけれども高山は厚い唇に冷たさうな笑を浮べて、

「いや、まあさう云はなくてもいい。さう云ふ事はつまり御前さんの不利益なんだ。まあそんな事はどうでもいいとして一杯飲まないか」

高山は次第次第に酔つて來た。黒い彼の顔は青黒く銅色になつて來た。さよ子は不快でたまらなかつた。立上らうかと思つたけれども高山の云つた「お前の爲にはならないぞ。」と云ふ言葉が頭に強く響いた。お前の爲にならない。つまり、高山は俺はお前達親子に金を貸してあるのだぞ。お前の身體は俺の金だぞ。反抗するならして見る。俺はお前の父を半屋に入れる事が出来るのだぞ。お

前はそれを欲するかと云ふ事であると思ふと、彼女は強ひて立上る事は出来なかつた。妾は父の爲にこの高山と云ふ金力主義の動物に反抗してはならない。妾は或る程度までは、自分の身が穢されない程度までは此の男の機嫌を取らなければならない。自分は父の爲め、そして戀人の爲めならばあらゆる苦痛を堪へなければならない。

かう云ふ想念が彼女の中を靜かに通り過ぎて行つた。彼女は彼に對する憤怒の感動を鎮める爲に五分間ばかりじつと下を向いてゐた。そして、憤怒の感動を抑へた後頭を上げて言つた。

「高山さん。妾御酒は戴けませんけれどもお酌致しませう」

かう云ふと高山は急に相好を崩したが、疑ひ深さうな目つきで搜るやうにさよ子を見て言つた。

「うん。さう分つて呉れ、ば何よりだ。さあ一杯ついで呉れ」

さよ子は高山の出した盃をつぎながら云つた。

「高山さん。妾、これから御相手はします。少し位は飲みもします。けれどもね、どうかそれ以上は、つまり、妾を下女として扱つて下さつても良う御座いますけれどもね、それ以上望まないやうにして下さい」



すると高山は大聲で笑ひ出した。

「何を云つてゐるんだね、まだそんな事を心配してゐるのか。そんな事あ俺あ考へちやるないんだ」  
高山はかう云つてぐでぐでに酔つて來た。そして大聲で歌い出した。さよ子は一刻も早く立去らうと思つた。

「それでは今夜は、もう」

高山はどんよりとした目を上げてさよ子の方へよろよろと歩いて來た。

「おいちよつと待て」

さよ子の手を取らうとしたがさよ子は、

「何をするのです」

とその手を振拂つて外へ飛出した。

「おいちよつと待て」高山の叫びが聞へた。彼女は夢中で一町ばかり走つた。

彼女は心臓の鼓動が鎮まると、太息をつきながら空を見上げた。空には星が輝いてゐた。天外遙なる星はじつと彼女を見守つてゐた。彼女は限り無き侮辱と憤怒と悲哀とを覺えて歩いてゐた。い

や歩いてゐるなどと云ふ事は意識してゐなかつた。たゞ彼女は耐へ難き侮辱と悲哀とに驅られて何處とも的度も無く歩き出した。彼女の心は強く壓せられるやうな氣持であつた。

彼女は無意識に町を離れて、淋しい町端れに來てゐるのに氣がついた。じつと闇の中を見つめると、そこには大きな櫻の木が立つてゐた。それは悪魔的な感じを起させた。

彼女がじつとその前に立つて夢想してゐると、ふと懐かしい感情が湧いて來た。それはかすかなる死の誘惑のやうにも思へたけれども、その感情はそれよりも他にあると云ふ事に氣がついた。それは哲雄の事であるのに氣がついた。さうだ、此の櫻の木は女學生時代に於ける哲雄との印象を起させるものであつた。あの中學生、制服の哲雄、丈のすらりとした哲雄が美しい同情の眼を持つて妾を注目して呉れた櫻の木であるもの。此の櫻の木の近邊で學校行歸りの哲雄と幾度行會つたか知れない。愛と愛との視線が幾度行會つたか分らない。二人の心が幾度和合したか分らない。それは懐かしい櫻の木であつた。

彼女はじつと目をつぶると、そこには紅顔の哲雄の顔、小年時代の無邪氣な哲雄の顔が浮んで來た。そしてじいつとしてゐると、その顔は次第次第に變じて來て、熱情と悲哀に満ちた現在の哲雄



に變るのであつた。

彼女は靜かなる深き冥想の中へ落入つて行つた。それはしんみりとした深い靜かな歡喜であつた。彼女の眼には涙さへ浮び出した。彼女はたまらなくなつてむせび泣いた。するとその涙は彼女を嬉しくした。その音は彼女の心の奥底までしんみりと入つて行つた。彼女は兩手を胸に當て、自分の鳴咽の音を食るやうに聞いてゐた。

と、彼女はけたましい叫聲を聞いた。彼女は深い冥想から投げ出された。彼女は飛上つて四邊を見廻した。彼女の眼は光り、髪の毛は恐怖に戦いてゐた。それは間違ひであつたらうか、暫らくはじつと靜かであつたが、再び暗黒の中に電光の閃めくやうに叫聲が闇を切つた。

「早く誰か来て頂戴!! 早く! 早く!」

それは暗黒な墓地、櫻の木の後からであつた。それは十二三になる少女の聲であつた。

さよ子は夢中になつて驅けつけた。けれども早く行く事が出来なかつた。荆棘は彼女の足を傷けた。彼女はあせつてはつたり前にのめつた。又起き上りながら叫んだ。

「今行きます!!」

かう云ひながら彼女はなほ進まふとすると、一箇の黒い者がバタバタと驅けて行つた。彼女は荆棘の中から空地に出たが、何處にゐるのか分らなかつた。

「何處ですか」

彼女はかう云ひながら、強い恐怖を感じつゝ前に出やとするとその大木の下に何者か仆れて居るのに氣がついた。彼女がじつと闇を透かして見つめるとそれは十二三になる少女であつた。彼女は怖れの爲に全身を振はせ、鳴きじやくつてゐた。さよ子は言つた。

「何うしたの、しつかりしない」

かう云つて彼女を抱起すと少女は云つた。

「許して下さい!!」

「何したの、妾ですわ、貴方を救ひに來たのです」

かう云ひながらその顔を見るとさよ子は叫んだ。

「お良さんじゃないの、姉さんだよ。」

するとお良は夢中になつてしがみついて來た。



「まあ此んな處ではいけませんから道まで出ませう」

さよ子はお良の手を取つたが、お良は歩く事が出来なかつた。

「妾、傷をしたの」と哀れな少女が言つた。

「まあ澤山ですか、まあ一體何うしたと云ふのですか」

けれども少女は答へなかつた。唯しきりに泣いてゐた。そして彼女は漸くの事でさよ子の肩に縋りながら歩き出した。さよ子はお良の手を自分の首にかけ、擔ぐやうにして道へ出て來た。

「まあ何うしたと言ふのです。あんな處に仆れてゐて。え」

けれどもお良はだゞ口ごもつてゐた。

「妾あの……」

「何うしたと云ふの、何故妾に話さないの。妾はね、お前さんの姉さんになつてやるつて言つたじやないの。味方になつて上るからいゝじやありませんか」

かう云ふと少女の顔には何とも云へない苦しい表情が現れた。二人は思はずじつと立止まつた。

「あの」かうお良は永い後にやうやく云ひ出したがその聲は顫へてゐた。

「あの妾ね、姉さんに話しますわ。妾誰にも話すまいと思つたけれど。妾姉さんを送つてから家へ歸るとね、妾神さんから用事を云ひつかつたのよ。それで妾此處、歸りに此處を通るとね、先方から一方の男の人が來たのよ。暗くて顔は分らなかつたけれどもね、男の人なり。それは聲でも分つてよ。その男の人が妾を見るとね、立止まつて妾にちよつと用事があるとかうと云ふじやありませんか。何んな用事なのと妾が聞くと、その人の云ふにはね、お前さんにちよつと頼みたい品物があると云つたの。それでね妾妾で用に足るなら何んな品物でも持つて行きます。その品物は？ と聞くとね、その人は實はその品物はその蔭にあるのだがちよつと一緒に來て呉れつて云ふの。それでね、妾氣味が悪かつたの。妾逃げ出さうとしたのですけれど、その人はいきなり妾を捕へて、口に手をあて、闇の中へ抱いて行つたの。そして妾、……」

「あゝ分つたよ。分つたよ。もう云ふんぢやありません。姉さんは悲しくて仕方が無い」

さよ子はいきなりお良の言葉を遮つた。

「何うして男はさう横暴でせう」



お良は又靜かに嘔り泣き出した。

「さあ此んな處に居ても仕方がありませんから家へ歸りませう」さよ子はかう云つて歩き出した。

さよ子は、門口まで來ると立歩まつて、お良をそこに待たせておいて、戸を開けた。

「たゞ今」

するとお神さんが出て來た。

「おや、さよちゃん。早かつたね、今夜は宿つて來ればよかつたに」

彼女は此の侮辱に對してむくむくと反抗心が起きて來たが、じつと抑へて云つた。

「だつてもう用が無かつたんですもの。それからね、お良さんが、歸りに路で石に躓いて怪我をして泣いてゐましたから連れて來ました」

「何、お良、何んと云ふ馬鹿な妓だらう。お良や、何うしたんだね。お入り」

女將は荒々しく云つた。

お良はびつこを引き／＼入つて來た。

お神の顔は忽ち憤怒に燃えて來た。その額の青筋は太つて、目は光つて來た。

「何うしたんだね。今頃まで何をしてゐたんだね!!」

お良はおろおろ聲で、

「お神さん、勘忍して頂戴。妾悪かつたんですから。妾怪我をしたんですから、けれども、彼女は聞入れなかつた。」

「何、怪我をした。自分の勝手に怪我をして許しませんよ!!」

彼女は叫びながら其處に在つた長煙管を取上げて打たうとした。さよ子ははつと思つて彼女を後にかばつた。

「まあ、勘忍して下さい。此んな小さい者ですからね」

すると、女將は底光りのする目で彼女をじろじろと見詰めて、

「何です、お前さんは、いけない處へつべこべ口を出して。それよりも旦那でも氣を利かして饜しなさい。此れから宿つて來なければ承知しませんよ」

さよ子はじつと黙つてゐた。女將はぶつぶつ小言を云ひながら奥へ行つた。

さよ子はお良を自分の四疊へ連れて來た。そして、そこに布團を敷いて、



「もう晚いからお眠なさい。眠つて居れば私が薬をつけて上げますから」お良は暫くおどおどして居たが、やがてそこへ横になると眠つてしまつた。

さよ子は靜かに立上つて、薬を取つて少女の患部につけてやつた。足に二三箇所の打傷が紫色に腫れて居た。それが了むと彼女は眠らうとしたが、仲々眠れなかつた。さよ子はじつと少女の顔を見ると少女は可愛さうに青白い顔をして疲れの爲に死んだやうに眠つてゐた。

さよ子は何うしても眠れなかつた。そして色々の想念は眠れない彼女の頭の中を過ぎて行つた。

「憐れなる者よ。弱き者よ。汝の名は女なり。女性の肉體は美しい。けれども腕力は到底男子の比では無い。私共女は男子の所有物だと爲されてゐる。何故、何故。男子はその情慾を満さんが爲に腕力を用ひる。あ、腕力を用ひるとは。美しきは戀愛、二人の意氣は投合し、二人の肉體は紅を呈し、二人の精神は一と爲り、精神は精神と結合し、肉體は肉體と結合し、此くして初めて二人の父母の性質を交へた新しき個體が現れる。とりもなほさず新しき個體の精神は父母の高潮せる精神であり、健全なる肉體は父母の昂奮したる燃ゆるやうな肉體でなければならぬ。然るに多くの男子はかゝる事を解して居ない。彼等は戀愛に對する智識無く、定見無く、唯情慾の満足の爲に腕力を

持つて少女を犯すとは、處女の貞操を踏み躪るとは……………」

何者かゝり彼女に説いた如くに思はれた。

「あゝ、良さん。貴方ももう處女ではありませんね。あゝ、まだ何物をも解さない時代に踏み躪られるとは……………。けれども、此の人ばかりじゃ無い。世の中に幾千幾萬人のかうした境遇に居る人が居るか分らない。そして妾、妾も危険な場處に立つてゐる。さうだ、狼の檻の中に居る……………。妾を殺さうとする狼。妾の貞操を狙ふ、肉に飢えた狼……………。然し妾は殺されない。妾を狙うなら狙つて見なさい。妾の貞操は哲雄さんに差上げたもの、妾の貞操は鐵よりも固い……………」

彼女は次第に昂奮して來た。彼女の顔はほてり、眼は光つて來た。

「妾を殺さうとする者よ。妾の敵高山。妾を殺せるなら殺して見ろ!!」

彼女は大聲で叫んだが、急に唇はぶるぶると振へて來た。そして、不自然に泣き出した、かすかな聲を上げて泣出した。ヒステリーの發作であつた。彼女の虐けられた肉體は病的に成つて來た。だが、此の發作は最初なので短かつた。三十分後には彼女は疲れの爲めに深い眠に落ちてゐた。

翌朝さよ子が目を覺した時、彼女の頭は重かつた。幾分か痛みさへ覺えた。彼女が横を見ると



そこにはお良が眠つてゐた。少女の落窪んだ目は力無く閉ぢ、營養不良のその顔は青白く、血のけが無かつた。さよ子は重い頭を起してお良の顔に覗くやうに半身を上げ、じつと少女の顔を見つめた。するとさよ子の優しい心からは同情の泉が湧いて來た。出来る事なら此の儘眠れるだけ眠らしてやりたいと思つた。けれども……彼女は思ひ切つて呼び起した。

「お良ちゃん。眠いだらうけれどもね、お起きなさい。もう夜が明けましたよ」

お良ははつと目を開いて飛上らうと爲ながら呼んだ。

「お神さん勘忍して頂戴!! 私寢過ぎてしまいましたから。直ぐ御掃除を致します」

彼女はをどくとして立上らうとする。

「妾ですよ。姉さんですよ。安心なさい」

彼女はじつとさよ子の顔を見つめて、

「あ、姉さんでしたか。晚いでせうか」

さよ子は慰めやうとして言つた。

「いえ。まだ、そんなに晚くはありませんよ。お良さん、氣がつかれましたか、足は何うですか、

痛みは取れましたか」

「妾、姉さんと寝たのを忘れちまつたわ。でも早くてよかつた。早く起きなければ私叱られますか  
ら」

「叱られるの？ 女將さんはお良さんを叱るの？」

「えい、私晚くなると又箒で打たれますわ。妾何度打たれたか分かりませんのよ。女將さんは妾を打ちますわ。妾早く行つてお掃除をしますわ」

お良はかう云ひながら起きやうとしたが、急に顔をひかめて又倒れてしまつた。

「痛い、昨晚の打身が痛みますか？」

さよ子はかう云ひながらお良の肩に手を掛けた。

「えいまだ痛むのよ。私何うしたんでせう。打身はそんなでもないですけど、足が刺すやうに痛むのよ」

彼女はかう云ひながら立上らうとしたが、再び

「あゝ痛い」と叫んで倒れた。



「まあ、何うしたんでせうか。静かにしてゐなさい」

さよ子はかう云つて起上らうとするお良の肩を無理に抑へつけた。とるとき下から女將の角ばつた聲が聞えた。

「お良や、何うしたの、もう晚いじやありませんか。早く掃除をしなさい」

「はい、今直ぐに」

お良はおどおどして立上らうとしたけれども立上る事が出来なかつた。

「何うしたんでせう。きつと神経痛でせう」さよ子は云つた。

「何をぐずぐずしてゐるんです、早く来ないか」

お神は又下で呼んだ。

「来いと云ふのに何うしたんだね。非道い目に會えますよ」かう云ひながらお神の二階へ上つて来る足音がした。

「お神さん、今行きますよ!!」

お良はかう云つたが、その時はもう女將は彼女の前に立つてゐた。

邪険さうなお神の顔は激怒の爲に赤くなり、右の手には長煙管を持つてゐた。

「何うして早く来ないの、この餓鬼は。痛い目を見なけりや云ふ事が聞けないのかね、早く起きて云つたら」

女將はいきなり手を押ばし、お良の襟首を掴んで引摺つた。

「女將さん、勘忍して頂戴!!」お良は引摺られながら叫んだ。女將は長煙管を振上げて彼女を打たうとした。

「待つて下さい」

さよ子は我知らず、女將の手に縋りながら叫んだ。

「待つて下さい。お良さんは足が痛いんですから」

「何だねお前は、つべこべ言はずに引込んでゐなさい」

女將は荒々しくさよ子を突き退けた。

さよ子はお良をかばひながら、

「女將さん、妾がお掃除は致しますから、ね、何うか後生ですから今度だけはお良さんを許して下さい」



さい。何うか」

女將は憎々しげにさよ子を睨みつけながら云つた。

「邪魔をするね、お前さんは。その餓鬼をよくかばつたね。だが、ね、今度だけは許してやるが、旦那の御氣に入るやうにしなければ、お前さんも此の通りですよ。よく覚えてゐなさい」

女將はかう云つて荒々しく立去つた。

さよ子は泣きじやくるお良に蒲團を懸けてやりながら、

「もういゝから安心しなさい。姉さんがお掃除をしますから」

「有難うね、姉さん」お良は蒲團の中で泣きながらかすかに云つた。

さよ子は階下へ降りて掃除をし出した。彼女はまだ氣分が勝れてゐなかつた。彼女の不快な頭の中を疑惑の念が通つて行つた。

「何と云ふ家でせう此の家は。妾はこんな方面の智識は無いんだけどもかう云ふやうな家は何う云ふ種類の家でせう。勿論、女の肉の爲に生活してゐる下等の家だと云ふ事は分つてゐるけれども妾は此んな家へ遣られるとは思はなかつた。一人限りで女將さんは居るやうだが、良人は有るんで

せうか。いや多分無いだらう。けれどもそれも分らない。何だか不潔な、薄氣味の悪い、罪惡の淵のやうな氣がするわ。それに、まあ、根性の曲つたつて、あの女將さんのやうな人は無い。あんな人にでも血が通つてゐるでせうか。いや、温い血は通つてはゐないでせう。あんな孤兒の、小さな女を虐げるんですもの。あの少女は可愛さうだ。もう、他の家ならまだ人形に夢中になつてゐる時代なのに、今まで一度も人から温い言葉を受けた事も無く、營養不良と過度の労働の爲めに瘠せてゐる。お、何と云ふ可愛さうな事でせう。何と云ふ悲愴な事でせう」

ふと彼女は芳香と衣摺れの音と足音を感じた。

「おや、さよ子さんの、お掃除ですか」

冥想の途中を破られて振向くと、其處には歌子が立つてゐた。

「歌子さんの」

「早かつたわね、お良さんは何うしたの」歌子はかう云ひながら齒を磨いてゐた。彼女は刺戟の強烈な寢巻を着、その顔の白粉は處々剝けかかり、その目は肉感的にうるんでゐた。

「お良さんですか、病氣なのよ、怪我をしたのですからね」



かう云つた時に「さうだ此の人に聞けば分る」かう云ふ考が閃いた。

「まあ、さうですか。大變悪いでせうか、何處に居るのお良さんは」

「二階よ、妾の部屋よ」さよ子はかう云つたが、その時は既に彼女は外へ出てゐた。

さよ子が二階へ上つて見るとお良は未だ泣いてゐた。

「痛い、お良さん。じつとしてゐなさいね。妾が御飯は持つて来て上げますからね」かう云つてさよ子は膳を運んで來た。

食事が済んで彼女はお良の患部に新しく藥をつけてやつた後、暫くじつと窓の外を見てゐた。彼女はお良の事や歌子の事や、そして哲雄の事で一杯であつた。だが彼女の心は幾分か平安な状態に入つて行つた。それは彼女の昨夜の疲れであり、そして今朝の勞働の結果であつた。十二三分、何物も考へない。そして自分の現在の境遇の外に彼女の心はさまよつてゐるが、やがて軽い足音の爲に破られた。

「良ちゃん、居たの」

歌子は入つて來たが、

「まあ、又眠つてしまつたの？」

さよ子はふと振向いて見るとお良の青白い顔は靜かに眠つてゐた。

「おや、又眠つてしまつたわ。妾いつ眠つたか知らなかつたわ」

歌子は歩み寄つて、さよ子の坐つてゐる窓へ來て、同じやうに初秋の氣分を帯びた外の様子をじつと見詰めた。

「何うしたと云ふの、お腹でも痛いの？」

「さうぢやないのよ、昨晚大變でしたわ」

「さう？妾運かつたから知りませんのよ。歸つたのは四時頃でしたから」

さよ子は昨夜の悲惨な出來事を思ひ出すと耐へられない程の感動を覺へて、さも同情するやうに幾分の憤怒さへ帯びて語つた。

「歌子さん、まあ聞いて下さい。かうなんですよ、妾が歸りにね、氣持が悪くて仕方が無かつたもんだからね、あの町端の墓地のある處ね、あそこに櫻の木があるでせう。あそこまで行つてね、私色々な事を考へてゐるとね、いきなり暗い墓地の中で『助けて下さい』つて誰か呼ぶじやありませんか



んか。妾すつかり驚いてしまつて、前へ出やうとすると一人の男が飛び出して行つたの。そして「今行きます」と云ひながら這ふやうにして行つて見ると、木の根に一人の少女が倒れて泣いてゐるじやありませんか。引起して見ますとそれがお良さんでした。事情を聞いて見ますと何うでせう」

さよ子は思はず泣聲に變つて來た。

「何うでせう、お良さんはその男の爲に辱められたのです。……………」

さよ子はもう云ふ事も出来ない程感動してゐた。

けれども歌子の顔は冷靜であつた。その目はじつと閉ぢて何事も無いやうであつた。次第次第に歌子の表情は變つて來た。唇には冷かな笑ひさへ浮んで來た。

「歌子さん、お良さんが可愛さうだとは思はないの。その男の横暴が憎らしくは無いの」さよ子は叫んだ。

けれども歌子は依然として冷に笑つてゐた。

「さうですか。それで、病氣になつたんですか」

何と云ふ答へだ。さよ子の心は憤怒に燃えて來た。

「貴方はこれが可愛さうではありませんか。お良さんが、貴女はそれ程冷かな人でうせか」

さよ子は殆ど立上らうとした。歌子はそれを止めながら云つた。

「え、妾冷かなのよ。冷かなくて何うしませう。けれどもね、さよ子さん、妾の言ふ事も聞いて下さい。私の云ふ事をね、そんなに怒つて立上らうとなぞせずね」

さよ子は坐つた。そして、歌子の顔をじつと睨みつけてゐた。歌子は語り出した。

「さよ子さん。妾はお良さんの事にも驚きません。妾自身がそんな事に對しては経験が十分あります。そんな事はね、貴女に取つては女の純潔と云ふ事が何れ程大切だと思ふか知りませんが、妾に取つてはそれが不思議な位よ。さよ子さんは世間を未だ見ません。けれどもね、女であつて男の二人や三人持たない人間が今の世の中に居りませうか。そんな人、一人の男より知らないと思ふ人は百人によくあつて一人位でせう。いゝえ、私は一人も無いと思ひます。何んな人でも、えゝ何んな人でもです。妾共のやうな者、かう云ふ階級の者は別にしても中流或は上流の人でも、世に云ふ教育者なんて大きな顔をしてさう云ふ事を否定し、他人の事まで、生徒と云ふ他人の事まで考へて居、そして云つてゐる人々でも、いや、さう言ふ人は別けてもです。さう云ふ人の裏面にはその



反動です、その反動の爲め却つてその純潔さを失つてゐます。

「妾は生まれたのは、山の中の村ですけれども、處女の純潔さを失ふと云ふ事は都會よりも甚いのです。私は未だ五歳か六歳の時からさう云ふ人達の話を耳に聞き、目に見ました。都會の空氣は濁つてはゐます。けれども田舎が決して濁つてゐないのではありません。田舎は却つてそんな事に対すると放縱に流れてゐます。田舎には今でも習慣があります。それは男が夜女の許へ忍んで行く事です。それは、娘でも、後家さんでも、人妻でも、若くても、老人でもかまはないのです。そしてそれは、恰も、一般の習慣になつて居ります。人妻だけは稀ですけれども。そしてそんな事は人々は皆笑つてゐるのです。そしてそれは一年中行はれます。ですから妊娠します。比較的少ない、産をする事が小いと云ふ事はそれは墮胎してしまふからであります。そして何んな村にでもその相談役になつて生活してゐる老婆が一人づつは居りませう。それは恰も産婆を必要とする以上に入用な事なんです。妾は小さい時から色々そんな事について聞かされました。でも女は未だ未だ放縱ではないのです。男と來ましてはお話にはなりません。男は腕力にでも訴へます。私は十三の時に此處に賣られました。そして未だ一週間も経たない内に或る男の爲に犯されてしまひました。此處では

それに反抗すると云ふ事は悪い事にされて居るのですから。妾はその時口惜しい感じもしました。泣いても見ました。けれども妾は白狀してしまひますが、妾の心の奥にはちよつとしたそれに對する歡喜が動いてゐました。さうです。たしかにさうでしたわ。人間と云ふものは皆そんな様な氣がします。男に犯されたると云ふ事で耐へ難い恥辱の念も起りますけれども。それと同時に自分に何だか尊い、自分の美に對する誇も覺えるのも慥ですわ。だつて男と云ふものは美しい者を、同じ女なら美しい方を探りますからね。つまり男に狙はれる程それだけその女は美しいと思ひますわ。「けれども初の中は厭な事でした。けれども度重なるにつれて段々厭でなくなりますわね。時々美しい男などを見るとこちらから進んで行く事もあります。妾は此れが人生だと思ひます。男なんてなる程腕力を振ひますから強いやうなものですけれど、存外、言ふ事さへ聞いてやれば弱い、馬鹿なものですわ。何でも云ふ事を聞くんですから。妾はそれが馬鹿らしく見えます。何うせ妾は腕力で征服された者ですから、思ひ在分敵は取つてやりますよ。

「あれから、妾が此處へ來てからもうよつ程になりますわ。そして妾は殆ど毎晩のやうに色々な男に接してゐます。少し位厭な男でも眼を閉いで居れば何でもありませんわ。それにね、中には美し



い人も居ますから。けれども私にはもう好き嫌ひするやうな氣になれません。誰れでもいい、何んな種類の人でもね、身體を任せて笑つてゐますわ。それにね、尙面白い事はさう云ふ人に晝間途かなんかで行會つた時はきつとその人は赤い顔をするのです。けれども私は平氣な顔をしてゐます。そして心の中では私の方が強いのだと思ひます。又その人のお神さんに行會つた時には尙面白いのです。あんな高慢ちきな顔をしてゐても亭主は私に迷つてゐる、それも知らないとは馬鹿くしくなりますわ。ほんとうに何と云ふ間拔でせう。私の方がやつぱり強いんだと思つてゐるのです。

「私は勿論子供なんか持ちたくありません。私のやうに大勢の男を知りますと、子供はもう出来ないので。私は、別に子供を持つて、他の事をやらうなんて思ひませんわ。こんな生活をしたものに何うしてそれが出来ませう。これが一番良い事です。そして私の性に合つてゐるのです。私は毎日毎日かうして生活してゐるのです。何もこれ以上、考へる必要はありませんわ」

歌子はかう云つて言葉を切つた。さよ子の眼は段々と力が抜けて來た。しまひには彼女はじつと頭を下けて考へ込んでしまつた。歌子は更に云つた。

「さよ子さん、だから私お良さんがそんな事になつたとしても別段驚きもしないのよ。え、さうで

すわ、こんな事は私共のやうな境遇に置かれたものには誰でも一度や二度ありますわ。お良さんも今の内は厭だと思つてゐるのでせうけれども、今に慣れてしまひます。それに女と云ふものは結婚前に一人や二人男を知らない人は無いと思ひますのよ。さよ子さん、考へて御觀なさい。え……」

さよ子の伏せた顔は赤くなつて來た。彼女の心には恐しい暴風が吹きまくつた。彼女の胸は針で突かれるやうに痛み、顔を上げる事が出来なかつた。だが、彼女は顔を強ひて上げて言つた。

「だけれど歌子さん。眞に愛する心が有つたら、その人と戀したつて良いじゃありませんか。その人にのみ操を立て通せば立派な事ぢやありませんか」

すると歌子は笑ひ出した。

「未だ、さよ子さんはお嬢さんですね。戀だつて愛だつて洗つてしまへばつまり同じですわ」

「いえ違ひます。違ひます」とさよ子は叫んだ。その顔は急に青く引締り、目は一種の凄みさへ帯びてゐた。

「さうですか。まあ、それでは違ふとして置きませう。けれどもね。さよ子さん、此んな處に居て何うする事も出来ませんよ。それこそ操どころか……」



「此の家は何う云ふ種類の家でせうか」彼女は聞きたかつた事を聞くために言った。

「此處ですか、こゝはね、つまり私のやうな女の爲に生活してゐる家なんです。私のやうな女に寄生してゐる家なんですよ」

彼女はかう答へたのみであつた。

彼女の素顔はみにくかつた。顔立ちは良いけれどもその皮膚はざらざらに荒れて、そばかすがあつた。

「私の顔ね、素顔はこうなんです。白粉の中毒で荒れてしまつただけだね、白粉をつければ美しくなるのです。だから夜は美しいのです。それにね、男と云ふものは顔なんか何うでも良いものです。人並でさへあれば、顔より先腰に目をつけるからね……」

さよ子は黙つてゐた。そして心の中には恐い争闘が起つた。それは恐い争闘で有つた。彼女の注意力は盡くその争闘に集中され、歌子が

「私又眠つてをかなければね、今夜も又行くんですから」と云つて立去つたのも知らない位であつた。

「自分の爲て來た過去の事が此歌子の云つたやうな行爲では無かつたらうか。「結婚前に一人や二人の男に接しない女は無いと思ひます」と云つた歌子の聲が耳に残つてゐる。そして又「さよ子さん考へて御覺なさい」と云つた言葉は更に彼女の胸に釘打つた。男は腕力に訴へると歌子の云つた言葉は、それは歌子が眞に愛する男を知らなかつたからで有ると云ふ事は分つたけれども、さよ子が哲雄に身を任せたと云ふ事は事實であつた。して見れば自分のした行爲が果して正しいものであるかと云ふ疑問に苦しめられた。

「私の行爲は果して正しかつたでせうか。果して私は鈍潔だと云ふ事が出来ませうか」

彼女は自身に問ふて見た。けれども彼女は答へる事が出来なかつた。彼女の胸は苦しくなり、その頭は痛んで來た。

「私は何と云ふ馬鹿な者でせう。お前にはそれに對する答へが出来ないのか」

彼女は恰も法廷に立つた罪人のやうな氣持になつて來た。

「お前が此の間に答へる事が出来なかつたらば既にお前は墮落してゐたのだ」と何者かが囁いた。

「あゝ何といふ恐い事だ。私はもう墮落してゐたのでせうか。え墮落してゐたのでせうか。



私の生命、私の生命は墮落してゐたのでせうか」

彼女は坐つてゐる事が出来なくなつて立上つた。けれども恐しい生命の暴風は彼女を吹き伏した。彼女は仆れながら、その頭の中は炎が吹きまくつた。

「お前は墮落したのだぞ、墮落したのだぞ」

一時間ばかり彼女は吹きまくる疑問の炎の中に有つた。彼女の心がへとへとに疲れ、彼女の肉體が疲労に落つたとき、静かなる平安が彼女を訪れて來た。

それは静かなる平安であつた。力有る心靈の叫びで有つた。

「いやお前は墮落したのでは無い。お前は哲雄にその身は任せたけれども、お前は哲雄を愛してゐた。そして、現在も愛してゐる。愛する事、眞に愛する事、その愛さへ持つてゐたならば決して墮落するものではない。世間の人々は肉體的の方面を卑むけれども、それは精神と離れる事の出来無いものである。彼等は兄弟で有る。眞に愛するとき、そこに精神と肉體とは結合する。精神のみの戀は不具で有る。又肉體のみの戀は墮落である。精神のみの戀は墮落では無いけれども不具である。それが眞理である。汝は哲雄を愛した。決して墮落したのでは無い。」

「たゞ汝よ、汝は哲雄に對する眞の愛を抱いてゐなければならぬ。死すとも愛を失つてはならぬ。其處に汝の生命が有り向上が有る」

彼女の心は歡喜の情に踴つた。彼女は恍惚状態に入り、そして靜かに夢の國に溶けて行つた。

彼女が目覺めたときにはもう晝であつた。お良はもうそこに起きて、坐つてゐた。

「お良さん、氣分は何うですか」

「えい、妾未だ丈夫では無いけれども、もう歩いてよ。姉さん有難うね。妾下へ行つて仕事をするわ」

彼女はかう云つて、顔に苦痛の色を浮べながら立上り、片足引摺りながら下へ降りて行つた。

その一日中さよ子は歌子の云つた言葉が耳についてならなかつた。彼女の心には悶えがあつた。

夜になると、又今夜もかたさよ子は身振ひしたが、その夜は女將は別に何とも云はなかつた。歌子は美しくと云ふよりも肉感的に粧つて、顔にはぺたぺたと白粉を塗りつけてさよ子の居る部屋へちよつと顔を出しながら、

「妾行つて來ますわ、今夜は何んな人だらうか。何でもいゝわね。でも妾美しい男の方が好きなの



よ、ほ、……………」

二五八

と彼女は笑ひながら出て行つた。

さよ子は早くから電燈を消して寝てしまつた。

一睡りして目を覺ました。何時頃であらうか、四邊は森としてゐた。かすかに時計の音がする。今丁度一時であつた。彼女は淋しかつた。何うしても寝つく事が出来なかつた。彼女はじつと室内を見廻した。窓の方を見ると其處には月が覗いてゐた。そして硝子の雨戸をきらきらと照らしてゐた。その光はさよ子の心を誘惑した。彼女は立上つて靜かに窓の側へ行き、ふと外を見ると思ひ掛けない者が居た。丁度さよ子の窓の下の部屋の戸がすつと開くと女將の姿——はつきりとは分らないけれども、その姿はたしかに、お神であつた——が現れた。そして立つてゐた。じつと見てゐると、何かに合圖してゐるやうである。さよ子はふとその方向に目を轉じて見ると、其處の板壁の影から一人の男が現れたけれどもそれは一人のみでは無かつた。又後にも一人出て來た。しばらくして又一人、都合三人の男が現れた。そして女將の方へ近づいて行くと、その女將の出て來た同じ入口から一人の女——それは歌子であつた——が出て來た。その後から今一人の女——それは未ださ

よ子の見た事の無い女であつた——が出て來た。そして一人の男の手を歌子は引き他の女は今一人の男の手を引いて、彼等の寢屋の中へ連れ込んだ。

お、何と云ふ光景であらう。純なさよ子の胸は再び傷つけられた。彼女はもう見るに忍ひなかつた。そのしんなりとした手を上げて目を蔽ふた。

「三人の肉に飢えた狼のやうな男、そして二人の女、金銭で操を賣る女、そしてその爲に生活して行く恐しい老婆、お、恐しい事だ恐しい事だ。何と云ふ魔窟でせう」

彼女の胸は新しく傷つけられ、全身は恐怖と屈辱の爲に顫へ出した。

彼女は靜かに窓を離れて自分の蒲團の中に蹲まつて振へてゐた。その醜さを見た自分が恥しかつた。

けれども、更に彼女を驚かしたものがあつた。それは恥づべき者である。自分と云ふものが、その行爲を憎んで憎んで憎み抜いてゐるにも拘らず、自分の肉體に卑しい感覺が幾分なりとも起つて來る事は到底否定する事の出来ない事實であつた。彼女はそれに對して死ぬ程の恥辱を感じた。

「恥づかしい事だ。恥づかしい事だ。此んな處に居れば墮落してしまふ」彼女は自分一箇を自由に



する事の出来ない現在の境遇を見ると、憤怒の爲に自分を掻きむしり度いやうな氣持になつた。

彼女はすっかり上氣してしまひ、失望の炎は彼女の身體を焼き盡した。憤怒に苦しめられ、恥辱の爲に青く爲つた。彼女は急に病的に笑ひ出した。それはヒステリーの二回目の發作であつた。

彼女はその壓へ難き病氣に身を任かし、ピクピクと足を顫るはせてゐたが、やがて發作が止まると恍惚に似た状態に落入り、貪るやうに眠つて行つた。

憐なる彼女よ。戀人の爲にその操を立て通す彼女よ。頑迷なる父は彼女を逆境に落入れ、魔窟の淫婦等は彼女を迫害し、憎むべき金力主義の怪物は彼女の美しき貞操を肉に飢えたる狼のやうに狙つてゐる。

## (七)

かうして二三日の月日は經つて行つた。相變らず同じやうな誘惑に對する争闘が續いた。それから後高山は顔を見せなかつたが、丁度十日目に一度さよ子を呼んだ。

さよ子は身振ひする程の憎惡の念に襲れて行つた。彼女は恐る可き或る事を考へたのである。け

れども高山は平氣な顔でゐた。眞面目なやうな顔をして一人でちぶりちぶり酒を飲んで、さよ子に勧めたりするのみで、恐る可き事に關しては何事も云はなかつた。恰も忘れてしまつたか、或は性質が潔白であるかと疑はせる位であつた。

さよ子は注意深く高山の様子を見張り彼れを用心してゐた。それは狼を見張る小羊のやうであつた。けれども高山はそんな事は一言も口に出さなかつた。此くして高山とさよ子の間には無言の争闘が續いた。

けれどもさよ子の性質は一日一日に變つて行つた。彼女のしつとりとした目は落つきが無くなり用心深くなつて行つた。彼女の皮膚からは段々と脂肪分が抜けて行つた。それから十日許り立つて彼女は出て行つたが歸つて來た時彼女の頬は火の様にほてつて、苦しさに息をついてゐた。そこに居たお良をつかまへてかう云つた。

「お良さん、姉さんはお酒を飲んだのよ。そしてかう酔つてしまつたわ」

彼女はかう云つて息を切つた。

「だけれどもね、お酒を飲んだつて良いわね。さうでせう、お良さん。お酒を飲むと云ふ事は墮落



したと云ふ事とは異ふからね」

彼女はかう云ひながら苦しさに、

「だけれど苦しいわね、お酒と云ふものは私生れてから初ですもの、こんなに飲んだのはね。頭がががんで、まるで熱病病みのやうですわ。お良さん姉さんは苦しいのよ。だから水を持って来て頂戴ね、良い子だからね」

お良は黙つて水を持つて来た。彼女の足は滑つたけれども、神経痛は治らなかつたので跛を引き引き持つて来た。

さよ子はその水を受取つて手に持つたが、持つた手はぶるぶる顫へて水が濡れた。

「まあ、手がこんなに顫へるわね、面白いわね、今夜は此の位飲んだのよ、もつと譯山だつたでせう」

かう云つて食べる様に飲みなほした。

「まあ、うまいわ、水つてこんなにうまいものなのか知ら。有難うね、お良さん」

彼女はかう云つたが又急に悲しそうな顔をして、

「私、飲みたくなかつたけれども、仕方が無いんですもの、私飲んでしまつたは。お酒を飲んじやいけないんだらうけれども、私頭が痛いから」

かう云ふかと思ふと又、

「けれどもお酒といふものは面白いものだわ、手や足が此んなに顫へるんですもの。お酒は百薬の長だつてね、私誰かから聞いた事が有りましたよ。あゝさうさう、私すっかり忘れてゐたよ。あの父さんでした。お父さんは大酒飲みでね、いつも酒臭い息を吐いてゐたのよ、そしてお母さんとよく喧嘩をしましたわ。お母さんは何うしてゐるんでせう。死んでしまつたのだわ。だけど私お母さんが居るやうな氣がして仕方が無いの。屹度居るわ。私行き會ひに行きませうか。さあ行き會ひに行きませう」

かう元氣良く云つて、彼女は子供の様な表情をして立上らうとするかと思へば、又悲しそうな顔になつて、

「駄目よ、お母さんは死んでしまつたのですから」

彼女は顔を伏せて居たが又顔を上げて。



「あの人は今何うしてゐるんでせう。何を考へてゐるんでせう。お良さん、さうさう、お良さんは知らないのね。あの人つてね、私の戀人よ。名は哲雄さんて云ふの、眉のきつとした、色の白い、口元の可愛らしい人よ。何うしてゐるんでせう。何を考へてゐるんでせう。私の事を考へてゐて呉れるでせうか。屹度、屹度、あの人は私の事を想つてゐて下さるわ。ねえお良さん、何う思ふの」

けれどもさよ子は段々と疲れて來た。彼女の目は閉ぢて來た。

「私眠いのよ、哲雄さんお休なさいね、身體を大切にしてくれ」  
かう云つて彼女は眠つてしまふのであつた。かう云ふやうな状態が続いて又一ヶ月は過ぎて行つた。哲雄と戀したのは七月であつたのに、その時は焼けつくやうな太陽が此の地上を照らしてゐたのだつたのに、今は九月の終りになつた。高原の夏は早く過ぎ去つて、早秋が訪れて來る。晝は照り輝やく太陽が天空に光つたが朝夕は秋の淋しい風が吹いた。

美しかつたさよ子の顔は一日一日に褪せて行つた。毎日毎日の怖しい争闘の結果であつた。それは酒の中毒であつた。彼女の頭は痛み思考力は減退して行つた。それは骨を削られるやうな魂の苦みであつた。

彼女は此頃から未だ經驗した事の無い肉體の變化を知つた。それは彼女に取つては不思議な現象で有つた。何となく氣のふさぐやうな、食物を見ても何となく食ふ氣にはなれなかつた。けれども此んな事は自分の毎日の争闘の結果だと思つてゐた。最初の中はこの現象が何を意味するものであるかと云ふ事は分らなかつた。そして最初の中はそんな事に氣づくやうな境遇にも居なかつたが、彼女は自分が何だか分らない、貴い何者かを所有してゐると云ふやうな氣がした。太陽と月と天空と地上とに於て何者かを創造してゐると云ふやうな意識が目覺めて來た。

けれどもそれが何物であるかと云ふ事は考へる事は出来なかつた。不思議な歡喜に似た感情、それが何者であるかと云ふ事、偉大な創造的の氣分が何物、何に原因してゐるか云ふ事は分らなかつた。けれども何物かを所有してゐる。そう云ふ事は無意識的に考へられたのであつた。そしてそれが彼女の苦み疲れた生命を慰安し力づけてゐるのであると云ふ事も分つた。そしてそれが彼女の生きんとする目的でも有り、又生命を自身であると云ふ事も分つた。その爲には如何なる苦痛、如何なる恥辱、如何なる迫害にも反抗して進むべきもので有り、又進まねばならないものであると云ふ事も分つた。今まで生きて來た彼女の全生命もつまりその爲で有ると云ふ事も分つた。それは



女としての全生命であると云ふ事も分つて来た。そして此の犠牲になり、此の爲めに努力してこそ生き甲斐もあり、如何なる境遇に落入るとも再び生き上る事の出来るものであると云ふ事も分つて来た。それは最も高尚な事でも有り、當然爲さねばならぬもの、絶對的にそう成つて行く可きものであると云ふ事も分つて来た。けれどもそれが何を意味してゐるもので有るかと云ふ事は未だ分らなかつたのである。

だが、その意識は一日一日に明かに、そして濃くなつて行つた。そしてそれは一種の壓迫さへも加へて来た。

だが、その精神上に目覺めた現象は一日一日と彼女の肉體にも現れて来た。彼女は最初自分の食物上の嗜好が變つて来たのに氣がついた。何を見ても食欲は起らなかつたが、酸味のあるものを見たときには驚く程の慾望を感じるのであつた。

「萬一や」彼女はかう思ふと全身に血が湧くのであつた。女としての偉大なる創造、女としての偉大なる藝術、女としての偉大なる使命、それは人間の創造である。

「萬一や」かう思つた彼女は一日一日とその想像を増して来た。彼女の腹部は美しく張つて来た。

そしてその乳は眞白く透明になつて来て、乳首は花のやうな色になつて来た。

それは早や動かすべからざる事實であつた。

人間の創造、それは眞に愛する人の愛の結晶であつた。戀人との共同の貴き創造。戀の爲に戀をしたのであつた。彼女は小さきものを得んが爲に戀をしたのではなかつた。又小さきものを得ざる様にと思つてゐたのでも無かつた。理屈では無かつた。恍惚の内に、それは殆ど夢幻の内でも有つた。自己の意志でも無かつた。自己の慾望でも無かつた。強ひて言へば、或る偉大なる力、神の意志の力に依つて目に見えないある力を持つて結合されたのであつた。彼女は愛してゐた。唯愛してゐた。彼女はそんな事について何も考へてゐたのでは無かつた。唯愛してゐたのだ。

眞の戀人との戀の結晶。さう考へた時にさよ子の胸は踴つた。それは無限に偉大なる歡喜であつた。

「私は私一人ではない。私一個の女と云ふものは我戀人の分身である。私の血液の中にはあの人の血液が混合してゐる。それは眞に愛するもの、當然至るべきもの、そしてさう無くてはならないもの。私はあの人と別れてゐても可い。私はあの人と決して別れてゐるのではない。私はあの人を之



程愛してゐる」

二六八

かう思ふと母としての本能が目覺めて來た。母としての本能それは偉大なる愛である。それは偉大なる犠牲的精神である。それは女として最も貴いものである。男子の到底推憶する事の出来ない偉大な精神である。母としての本能、子の爲ならば死すともと思ひ詰めるその心、眞に純潔な女の精神は偉大である。彼女の心に湧いたものは最初歡喜の涙であつた。そして母としての自覺であつた。小兒を守らんが爲には死も辭せざる偉大なる精神であつた。そしてそれは男子としての犠牲、勇猛の精神よりもより偉大なる貴き感情であつた。

彼女は幾度その恐しき程偉大なる創造の前に踴つたであらう。凡ての迫害、凡ての恥辱に疲れたる彼女を導いて呉れる、それは唯一の燈火であつた。

「これは私の最も大切なもの、最も秘密なもの、最も貴いもの、最も嬉しいもの、そして之が私の味方になつて呉れる最も力強いもの」

彼女はかう思ふと何處までも自分の純潔さを保護しなければならぬと決心した。

「私の生命、私の凡てのもの」

彼女はかう云つて微笑んだ。

彼女は自分の責任を感じた。そしてその創造は自分の美しい秘密で有つた。彼女はその氣分をその創造をより美しくさせる爲に秘密を保つた。自分のみで、なる可く自分のみで、それは恰も藝術家が自己の作品をなるべく秘密に育てんとする氣分に似てゐた。自分のみで、自分のみで、そこに美しき戀の結晶を創造する事が出来、そこに眞の生命が有ると思つた。

だがその美しい秘密は破れてしまつた。

それから、彼女が自分の創造に目覺めて歡喜の情に踴つてから十日の事であつた。

彼女は洗湯へ行つた。洗湯は入つて見るとすきであつた。彼女と外に五十位の婆さんと、それに十二三になる少女が入つてゐるのみであつた。彼女は靜かに着物を脱いだ。美しい輪廓、ふくらみのある曲線、彼女の身體は少し瘠せてゐるたけれども美しかつた。眞白い皮膚は透き通つてゐるやうであつた。彼女は靜かに入つて居た。彼女が入つて五分位すると、戸が開いて歌子が入つて來た。歌子はちよつと鏡を見てから着物を脱いだ。圓熟した脂肪分の多い、肉感的な曲線を動かさながら入つて來たが、さよ子が沈んでゐるのを見ると、



「おや、さよ子さん、やつぱり來てるたの。私屹度お湯だと思つたから、後を追つて來たの」  
 さよ子はちよつと顔を赤めたが、

「まあよくいらつしつて」

かう云つた。

歌子はやつぱり沈みながら、

「近頃急に涼しくなつてね」

かう獨り言のやうに云ひながら、ぢやぶぢやぶ洗ひ出した。

二人は十分ばかり浸つて居たが、

「さよ子さん、私流してやりませうか」

かう歌子に云はれてさよ子は、

「有難う。だけどね、私もういいのよ。私昨日も入つたのですから」

「まあ昨日、だつていいじゃありませんか。私だつてさうだわ」

歌子にかう云はれるとさよ子は、

「歌子さん、私先き洗つて上げませう」

と云ひながら思はず立上つた。すると歌子は立上らうとして、下からさよ子を見上げたが、

「まあ、美しい身體ですね」

さよ子ははつとして身を横に向けた。歌子の目はじつとさよ子の乳のあたりを見つめてゐるが、  
 小さな聲で、

「をや」と叫んだ。

さよ子ははつと顔を赤らめて、

「何うしたんですか」

すると歌子は笑ひ出した。

「いえ、なんでもないのよ、お目出度うね、さよ子さん」

さよ子は耳元まで赤くなつて、再び沈んでしまつた。

「まあ、初心なのね、さよさんは」

歌子がかう云ふと、そこに居たお婆さんがじつと自分を見つめてゐるので、さよ子は泣き出し度い



程恥かしくなつた。

歌子は黙つてしまつたが、それでもくすくす笑つてゐた。

二人は湯を出したが、道で歌子はかうさよ子に囁くのだつた。

「さよ子さん、お目出度うよ、まあ油断がならないわ」

けれどもさよ子は黙つてゐた。歌子は又聞いた。

「旦那でせうね、さうでせう。大事にしておやりなさい」

さよ子は、「いゝえさうじゃないのよ」と云はうとしたが、思ひ直して黙つてしまつた。そして彼女の心の中では、自己の創造に對する不満を覺えた。彼女は、

「何うして、あんな男のせうか。これは私の戀人の愛の結晶でありますよ」と云つてやりたかつたが、彼女の心は餘りに悲痛であつた。彼女は一種の恥辱を感じた。

彼等の云ふ事爲す事の一言一行も凡て純潔なさよ子の耳には針を刺したけれども、こんな事は未だ未だ彼女の臆ては苦しむ可き迫害に比べれば何んでもなかつた。

彼女を待つ運命、それは餘りに悲惨であつた。悲惨な運命、それは誰か形容する事が出来やう。

誰か豫知する事が出来やう。彼女を待つてゐる悲惨な運命、おゝそれが如何に峻烈なものであつたかを誰が知つてゐるやう。誰が知つてゐるやう。それは餘りに悲惨な事であつた。餘りに傷ましい事であつた。之より後に彼女に味はしむべく待つてゐた苦痛、それは大なるものであつた。今まで嘗めた苦痛に比べれば、それは餘りに大なるものであつた。

今まで遇つた苦痛でさへも彼女の骨を削つたのに、更に大きい此の迫害を何うして彼女が抜ける事が出来やう。如何にして純潔を保ち得るか。如何にして墮落せずに行く事が出来やうか。それは唯神が知つてゐる。

十月二十日の夜、彼女は、又高山に呼ばれた。

さよ子はそのとき幾分か頭痛がしたのであるけれども耐へられるだけは忍ぶ、彼女の之が心であつた。耐へられるだけ、酒の爲に身を持ち崩した頑迷なる父に對しても、女性の何者かをも解せない父に對しても、子は父の所有物であると信する父に對しても、女は品物であると信する父に對しても、耐へられるだけ忍ぶ。之が彼女の心であつた。

耐へられるだけ忍ぶ。之が彼女の心であつた。金力の他は何者も信じない高山に對しても、女子



は男子の情慾を満足せしむべき動物に過ぎぬ、と信ずる高山に對しても、強慾と狂暴と陰險と殘忍の圍りである高山に對しても、堪へられるだけ忍ぶ。之が彼女の心であつた。

此の夜さよ子は何となく不快な氣分に包まれながら出て行つた。彼女が高山の部屋に入つた時彼は先に來て待つてゐた。

「今晚は」

さよ子は頭を下けて坐つた。

「いや、晚かつたね。私は大分待つたよ。それにね、用事が二三日有つたものだからね。私はお前さんに逢ひたいと思つてゐるのだが。まあそんな事は何うでいい。さあ一杯注いで呉れ」

さよ子はもう嫌惡の情と戦ひながら、そこにある徳利を取つて注いでやつた。黄色な酒は盃に満たされた。高山はそれをその厚い口唇にあて、一度にぐつと飲みほした。

「さよ子さんもお上り」

と高山は云つた。

「え有難う。私頭痛がしますから」

さよ子は眞面目な顔で口早にかう云つた。

「まあいゝじゃないか、一杯位」

高山は更に進めるのでさよ子は受取つて、それを下に置いた。高山は一人でぐいぐい飲んでゐたが、段々酔つて來た。さよ子は勧められる儘に二三杯を飲んだがその爲に非常に酔つて來た。彼女は耳のあたりまで眞赤にほてらしてゐた。高山は一升餘りの酒を飲んだので、その赤ら顔は銅色になつて來た。彼はじつと黙つてゐた。

不思議な沈黙であつた。高山は何事か計畫でも考へてゐるやうであつた。彼は何事も無いかのやうに装ほひつゝも時々何事かを考へ、その凄い目を光らした。高山の様子は次第次第に崩れて行つた。

さよ子は何事にか恐れる如き様子をしてゐた。彼女は萬一も高山がちよつとでも彼女を挑む様子がありませんかを捜すやうであつた。高山は何か考へてゐる、何を考へてゐるのだらう、そして何時もと異つた様子が妙だ。彼女は色々考へて見たけれども分らなかつた。

高山はじつと目をつぶつてゐるが、口を切つた。



「さよ子さん。實は今日はね、ちよつとお前さんに話し度い事があつたんだよ」  
 さよ子は彼が何んな事を云ふのであらうかと聞耳を立てた。

「一昨日の事だつたよ。私は用事が有つて××町へ來掛つたんだ。その時、あの角ね、あの肉屋の前まで來ると、其處に人が群がつてわいわい騒いでるぢやないか。大部大勢だつた。その大勢の人がわいわい云つて何か見てゐるんだ。それで俺も何となく行つて大勢の人を押し分けながら前へ出て見ると、其處には二人の男が居たんだ。一人の男は五十恰好の男なんで、ぐでぐでに酔つて泥まみれになつて倒れてゐる。すると今一人の男、三十五六、四十にもならうか、商人體の男だつた。その男が、ぐでぐでに酔つた男の襟首を掴んで怒鳴つてゐるんだ。『さあ此の野郎もう承知出來ねえぞ。泥棒奴、さあ警察へ來い。さあ立たねえか』つてな。すると一人の男は襟首を掴まへられながら『おい、待つて呉れ。何をするんでえ。俺をどうしやうと云ふんだ』つて顔中泥だらけになつてわめいてゐるんだ。見物人は面白がつてわいわい囃し立てゐるんだ」

かう云つて高山は言集を止めて、酒を一杯ぐつと呑みほした。

「それでな、俺も見るに見かねて、出て行つて事情を聞いて見るとかうなんだ。その商人風の男つ

てのは酒屋の亭主でな、そのでくでくになつてゐる男に酒代を貸してあるさうだが、幾度催促しても拂はない。それで今日はどうしても拂はないと云ふなら、警察へ連れて行つても拂はせてやるとかう云ふんだ。そこで俺はその男にまあまあさう言ふものではない。之は俺の知つてゐる人だから明日まで待つてやつて呉れ。そしたら俺が拂つてやる。とかう云つて漸く宥めたんだ。その金は此處に持つてゐるんだ」

かう云つて高山は紙幣を出した。

「つまり此處に五十圓ある。之だけあればその男は助かるのだ」

高山はじつとさよ子を見つめた。彼の凄い目の底には一種の威壓があつた。高山はじつとさよ子を眞正面から見つめた。さよ子にはそれが何を意味するのか分らなかつた。じつと見つめた高山の顔には冷笑の色が漂つたか、それは臆て卑劣な笑にと變つて行つた。さよ子は不思議さうに、そして嫌惡の情に包まれながら高山を見つめた。さよ子の胸には次第に不安が高まつて來た。が高山の顔は急につこりと笑つて、口を切つた。

「さよ子さん。俺はね、お前さんを愛してゐるんだ。え、實際を云へば惚れてゐるんだ。そして、



俺はお前さんさへ承知なら着物でもなんでも買つてやるんだ」

さよ子は急に侮辱を感じた。彼女の酒でほてつた顔はその爲に眞赤に昂奮して來た。

「まあ貴方は何を云つてゐるのです。私は貴方を愛してゐません。そして貴方も眞實には愛して呉れないのですわ」

「いや、俺は何と云つてもお前さんを自由にするんだ。そして自由にするだけの権利を持つてゐるんだ」

高山は忽ちその顔に狂暴の色を表して叫んだ。

「何ですつて、貴方に権利が、そんなものが何うしてありませう」

彼女は立上らうとして叫んだ。その目の色は黒色に光つてゐた。

「おいおい、可ひ加減にしろ、俺は金を出してお前を買つたんだ!! 俺はお前を自由にする事が出来るんだ」

高山はかう叫んで、狼のやうに身構へて今にも飛び掛らうとした。

「妾は歸ります。貴方は妾に何と云ひましたか、決して身體は穢さなくても濟むと云つたじゃあり

ませんか」

「俺はな………」高山は唇を紫色にしてぶるぶる顫へながら云つた。

「俺はな、お前の父と約束したんだぞ!!」

「いえ、妾は知りません!! 歸ります!!」

さよ子は立上つて、飛出さうとした。彼女が二三歩戸口へ走つて出やうとする時に、高山の一聲は彼女を釘づけにした。

「行つて見ろ、貴様の父は監獄だぞ!! 貴様はその酔ひ潰れてゐた男を誰だと思ふ!! 貴様の父だぞ!!」

さよ子の頭は重い鐵鎚で打たれたやうにぐらぐらした。さよ子は全身の血汐が一度に停止したと思つた。

「えつ!! お父さん!!」

かう叫んで彼女は振向いた時に、彼女の顔色が眞青かつた。高山の顔は冷笑で光つてゐた。  
「さあ、行けるなら行つて見ろ!!」



けれどもさよ子は行く事が出来なかつた。彼女の耳には高山の聲さへ分らなかつた。彼女の心は渦巻いた。それは悲痛な争闘であつた。

「お父さんが……、そんな姿で」彼女はかすかにかう叫んだがよろよろとよろめいた。

高山は冷笑を浮べつゝ、立上つて、詰めよせて來た。高山の片手には紙幣を握つてゐた。高山はじつとさよ子を見つめた。二人の距離は二尺に満たなかつた。高山はさよ子を睨みつけたままじりじりと詰め寄せて來た。さよ子は眞青な顔をして高山を見つめてゐた。二人の間には剃刀のやうな沈黙が続いた。

「さあ返事をして呉れ」

けれどもさよ子は答へる事が出来なかつた。

「え、此の金が欲しくないのか」

高山はかう云つた。さよ子はぶるぶる顫へてゐた。高山は靜かにその右手を上げた。新しい紙幣が電燈に光つた。そして左手はさよ子の手を握らうと、じりじりと動いて行つた。

さよ子の瞳は次第次第に開いて、その顔は苦痛のためにひきゆがんだ。

紙幣は彼女の目の前に差上られた。さよ子の手はじりじりとその紙幣の方へ動いて行つた。高山の左手はさよ子の左手に觸れ、さよ子の右手は紙幣にふれた。さよ子はじつとその紙幣を握つた。だが次の瞬間、さよ子の顔色はさつと變ると、

「何をするんです!!」

一聲絹を裂くやうに叫ぶといきなり高山の胸をどんと突いた。紙幣はぐしやぐしやに揉まれてしまつた。そしてその紙幣は高山のよろめく鼻柱にあたつた。

「貴様つ!!」

高山が唸つたときにはもうさよ子は電光のやうに去つてしまつた。

彼女は闇の中を走つた。彼女の頭は混亂してゐた。暫くの間は何の考へも浮んで來なかつた。たださかまく混亂の大波が起つてゐた。

「何と云ふ悪黨であらう。妾を殺さうとする男、妾の貞操を踏み躪らうとする高山」

彼女はかう呟いたが、彼女にはより大なる苦痛の叫びがあつた。

「私は何と云ふ愚かな女でせう。私は金の爲に自分の身を犠牲にしやうとする處だつた。あゝ、危



い、危い。私自身は何と云ふ女でせう。私はそんな弱い女でせうか」

彼女の心は後悔の涙に濡れ、彼女はふらふらと歩いた。

「けれども、父は、父は、事實でせうか。大勢の人の前に仆れて恥晒しをしてゐる。あゝ何と云ふ浅ましい人でせう。だが……」

彼女の心には別な思想が閃いた。

「だが私は父に對して罪惡を犯してゐるのでせうか」

それは怖い相念であつた。

「子として、如何に父が恥晒しであつても、無理悲道であつても、父を捨てる事が出来るでせうか。私は何うすれず良いのでせう。今まで私は耐へて來たのに……」

彼女はかすかに叫ぶやうに云つた。

「何ちらが正しいのでせう。父に盡して私が汚されるか、又は戀人の爲に純潔を全ふして行くか」  
けれども彼女には判断がつかなかつた。彼女の心はあせり、歩調は亂れて來た。

「え、何ちらが正しいのでせうか。父を生かして私の戀を殺すか。又は父を殺して私を生かすか」

それは彼女が高山に戸口で呼び止められた時「誰だと思ふその男は、貴様の父だぞ」と云はれた一瞬後の思想に似てゐた。

「私は親不幸ですか。おゝ、親不幸でせう。今までは自分を殺して凡てのもの、自分の命も、良人も、捨て、父の犠牲になつた人が親孝行です、けれども、現在私の場合には何うでせうか。私は一人の戀人に盡さうとしてゐます。私は父の爲に盡しました。父は最初私を賣つた。その時、私はこんな事にならうとは思はなかつた。それに彼等は私の貞操と云ふものは犯さないと云つたのですから。私は欺かれました。父に、父に欺かれました。父は酒の爲に私を犠牲にしやうと云ふのでせうか。何と云ふ怖い父でせう。」

「そんな人の爲に私は犠牲にならなければならぬのでせうか。それが親孝行でせうか。私が汚されたら、そして父を罪人にさせなかつたら、それが親孝行だと世間の人は言ふのでせう。それは果して美しい事でせうか。」

「それに私は一人ではありません。私は妊娠してゐます。小兒の純潔を保護する爲には私は何んな事でも耐へます。如何なる事とも戦ひます。えゝ如何なる事とも、如何なる者とも、そして如何な



るものも犠牲にします」

彼女は昂奮して叫んだ。

「私は父が罪人になつてもかまひません。横暴なる父に何を盡す事が要りませう。私は父が監獄に引かれるのを見てゐませう。私の純潔を保護する爲に」

彼女がかう考へたときはもう家の側まで來てゐたのに氣がついた。

彼女は靜かに戸を開けたが、下には誰も居なかつた。彼女は二階の自分の部屋へ入つた。彼女は自分の部屋へ入ると、ぐつたり疲れてしまつてそこに坐つた。

だが、暫くすると何だか部屋の中が不安なやうな氣がした。何者かゝ空氣を掻き廻したらしかつた。と、何處からか啜り泣の聲が洩れて來るのに氣がついた。彼女はすぐ立上つて四邊を見廻したが分らなかつた。

「誰なの？」

かう云つたとき彼女は押入の中に何者かゝ蹲つてゐるのに氣がついた。

「誰なの、そこに居るのは？」

彼女はじつと見つめて、

「お良さんなの？」と云ふと、

「姉さんなの？」

お良のかすれかすれな泣聲が聞へた。

「出ておいでなさい」

「女將さんは居ますか？」

その聲は怖れで顫へてゐた。

「いえ、誰も。姉さんきりよ。出ておいでなさい」

「お良は出て來たが、立つ事が出來なくて這ひ出して來た。その着物は破れ、髪の毛はくしやくしやになつてゐた。

「何うしたの、お良さん。又女將さんに叱られたの」

「えい、女將さんは私を打つたのよ」

「まあ何うして、まあ、立てないのですか!!」



さよ子は叫んだ。

二八六

「え、私あの時から足が悪いのよ。それでね、今夜、用事に行かうと思つて立上ると私足を引つかけたのよ、あの籠に。するとその籠が仆れる拍子に茶碗を壊したのよ。そしたら、女將さんは私の足を煙管で打つたのよ。」この足が壊したのだね」と云つて私の足を打つたのよ。痛かつたわ。幾つ打つたか分らない位打つたのよ。そしたら煙管が折れてしまつたわ。それで女將さんは又怒つてそこにあつた火箸を持つて打たうとするから、夢中になつて外へ飛び出して小路の間へ入つて息を殺してゐたのよ。すると半時間程して女將さんは何處かへ出かけたから、家へ入らうと思つて、立上らうとすると足が痛くて歩けないの。で這ふやにして入つて來たわ。この家は怖いんだけど、私お家がないんですもの……」

お良はかう云つて泣きじやくつた。

「それから二階へ上つて此處に隠れてゐたわ。私何うしませう。女將さんが歸ると又叱られるわ。彼女はかう云ひながらぶるぶる顫へてゐた。さよ子はその足元に、腕白者に捕へられた小雀のやうに胸をどきどきさせてゐる少女が可愛さうであつた。

「まあ、可愛さうに、何と云ふ人でせう。何處を打つたの」

さよ子はかう云つてお良の足を見ると、黒く血の死んだ打身が五六ヶ所もあつた」

「まあ、非道い。だけどね、姉さんが來たのだからもう大丈夫ですよ。安心しなさい」

さよ子はかう云つて慰めながらお良の足に藥をつけてやらうと立上つた。その時下の戸が開いて女將の勘高い聲が聞えた。

「さよ子さんは歸つたの？」

さよ子ははつとして思はず坐つた。その手には藥を持つてゐた。お良は顫へ上つて押入の中へかくれた。

「さよ子さん、居ないの？」

女將の鋭い聲が又した。

「はい、此處に居ますよ」さよ子は答へた。

と、梯子段を上る荒々しい足音がして女將の姿が現れた。彼女の青黒い顔は怒の爲に銅色となりその凄い目はじつとさよ子を睨みつけた。



「お前は大變な事をしたね」

「何ですか、女將さん」

「何ですかも有るものですか。お前さんは旦那を何うしたね、え旦那をさ。分つたらう。私が今外へ出て行つたのさ。そして私が行つたら旦那が非道く怒つてゐたよ。何うするんだね、旦那を何うするんだね」

女將の聲は高くなつて來た。

「何うするもありませんわ。私、あんな男は嫌ひです」

「何、なんだ？」女將は叫んだ。

「何、何です。今一度云つて見なさい」

さよ子はきつとして、

「何度でも云ひますわ。私あんな狼のやうな男大嫌ひです」

女將はそこにある物差しを掴むと飛上つた「お前のやうな女は痛い目を見なけりや直らないと云ふのかね」

「えいさあ打つて下さい。さあ打ちなさい。私を自由に出来るものだと思ふならさあ打ちなさい」  
さよ子はかう云つて坐つた。

「打たなくてさあ、性をつけてやるから」

女將は怒の爲に全身を振るはして物差しを振り上げた。

「さあ打ちなさい」さよ子は下を向いた。

「何つ!!」主婦の叫が響くと同時に物差しはさよ子の頭上に落ちた。さよ子はかすかな叫び聲を上げた。二つ、三つ、彼女の髪の毛は亂れて來た。さよ子の頬には一本又一本、物差の跡が赤黒く現れた。さよ子は齒を食ひ縛つて叫んだ。「さあ打ちなさい!!」

「打たなくてさ、強情な女め」女將は叫んで、更に力を籠めて打ち下さうとした時、何者か、女將の足に縋りついた。それはお良であつた。彼女は押入の中から這ひ出して來た。

「女將さん、姉さんを打つなら私を打つて丁戴」

女將はお良が不意に現れたので驚いたがその驚きは忽ち燃ゆる憤怒に變つた。

「この餓鬼奴、何處へ行つたと思や、こんな處に居たのか」女將の物差しは憐れなお良の肩先に落



ちた。

「まあ、お良さん!!」さよ子は叫んだ。

「何うして出て来たのです。さあ女將さん、お良さんを打たずに、そんな小さなものを打たずに、私を打つて下さい」

さよ子はお良をかばった。

女將はさも憎らしげに二人を見て、

「何と云ふ強情な女だらう。今夜の中に考へてゐなさい。明日も又強情を張ると打ちますよ」  
けれどもさよ子は黙つてゐた。お良は泣きじやくつてゐた。

「蓄生!! 二人共、どいつもどいつも、強情者奴!!」

女將はかう云つて梯子段を下りて行つた。

さよ子は女將の去つたとき、自分が彼女のやうなものよりも遙かに大膽で、眞の勝利は自分にあると云ふ感情が起つたが、その一瞬後さよ子は頭部の痛みを感じた。と同時に、お良を思ひ出した。彼女がお良の方を向いたとき、お良のそこに蹲まつて泣いてゐるのを見た。彼女は両手に顔を埋め

て泣いてゐるが、やがてその顔を起したときお良の小さな目は異様に光つてゐた。彼女はじつと何者を見つめてゐるやうな、そしてぞつとするやうな表情であつた。お良は瞬きもせず、壁の一ヶ所に視線をつけてゐた。

さよ子はぞつとして、

「お良さん何うしたの、もうよいからね。お休みなさい」

けれどもお良に瞬きもしなかつた。ふと立上りながら叫んだ。

「お神さんが打つの、私何うしませう!! あれ、勘忍して丁戴。あれ女將さんが私を打つのよ」  
彼女はかう叫んで、逃げやうとしたが、足が立なかつた。ぼつたり其處に倒れながらもがき苦しんだ。

さよ子はお良を抱きしめた。

「まあ、お良さん、しつかりしなさい。女將さんは居ませんよ」  
けれどもお良はさよ子の手を拂ひのけて叫んだ。

「あれ、誰か来て丁戴。女將さんが私を殺すのよ!!」



お良は悶え悶えて、轉々として坐敷中を襪び廻つたが、終にはとうとう聲は嘎れてしまい、その瘠せた肉體は疲れ切つて、きよとんとした目をしてゐた。やがて深い眠りに落入つてしまつた。

さよ子はその憐れなお良に自分の布團を一枚懸けてやつた。彼女はもう泣く事が出来なかつた。虐けられ、虐けられたあけく、まだ子供なのにその肉體を辱められ、終りには發狂したお良の事を考へるとさよ子の目には涙も出なかつた。

けれどもその時さよ子自身としても他の事を考へる餘裕はなかつた。さよ子自身が發狂するのではないかと思はれた。彼女の胸は痛み、頭は鳴つた。やがて彼女はあの怖しいヒステリーの發作に襲はれた。それは長い長い發作であつた。さよ子はぶるぶるとその肉體を振はせ、發狂して横はつてゐるお良を抱いて泣いてゐた。長い發作の後彼女は死んだやうな疲労に襲れて、やがて深い眠りに落ちて行つた。

深更、さよ子はふと目を覺ますと薄ぼんやりした中に一人の少女が立つてゐた。最初それが誰であるか分らなかつた。そして誰であるか分らないと云ふ事に對しても疑問を起さなかつた。だが、それは一人の少女、何處かで見た事のある少女であると云ふ事だけは分つた。だがその少女は不思議な透明な硝子のやうな色艶を持つてゐた。けれども少女は向ふを向いてゐたのだからその顔は分らなかつた。やがて彼女は何時の間にか靜かに歩いてゐた。そして少女とさよ子の間隔の變らないと云ふ事に依つてさよ子も同じやうに歩いてゐる事に氣が附いた。何時の間にか彼女等は町に出てゐた。彼女は梯子段も下りもせず、又戸も開けもしなかつたが、いや、そんな事は意識せず、今は町の通を歩いてゐるのであつた。少女はひどく疲れたらしく歩いてゐた。そしてさよ子との間には一定の間隔があつた。さよ子が氣がついて見ると、少女は止つてゐた。と同時に其處は家は一軒も無い、淋しい町端れだと云ふ事に氣がついた。少女は止つてその時初めて後を向いた。そしてさよ子は一種異様なからからと云ふやうな音波を感じた。それは少女の聲である事に氣がついた。

「さよ子さん。お達者に」

その時それはお良であると云ふ事に氣がついた。

少女はかう云ひながら、何かの中へ入らうとした。さよ子がふと氣がつくとそれは深い古井戸であつた。さよ子は初めて此の少女が此の井戸の中へ入るのだなと思つた。けれども少しもそれは怖ろしいと云ふ感じは起さなかつた。



少女はにつこりと笑つてさよ子の方を向きながら、

「姐さんは何うしてそんな様子をしてゐるでせう。私はね、美しい處へ行きますわ。此の下には美しい、花の咲き亂れた天國があるのですわ。美しい、そして静かな、悪い人の一人も居ない處よ。人は皆んな同じやうに幸福に暮してゐるのよ。美しい處ですわね。私嬉しいのよ。それに外の世界は何と云ふ怖ろしい者ばかり居るでせう。御覽なさい」

彼女はふと自分の周囲を見廻すと、其處は非道く灰色の砂漠で、大きな蛇や蟻がのろのろと這つてゐた。その一疋はさよ子の足に絡みつかうとしてゐた。

さよ子は不思議な事にその蛇、恐い蛇を見ても怖ろしいと云ふ感じがしなかつた。しなかつたと云ふよりも、靜かに消えてしまつたのであらう。そして、さよ子の前には美しい天國が開かれた。其處には蝶々が舞つてゐた。花が咲いてゐた。そして、其處は靜かであつた。ふと、其の中の蝶と戯れて遊んでゐる少女を見た。それはお良であつた。

彼女は歌を歌つてゐた。美しい一種特別な聲であつた。とその音調の中に別な調子の流込んでゐるのに氣がついた。それは鳥の聲であつた。次第次第に鳥の鳴聲は高くなつて來た。すると彼女は

手にさわる感じの悪い物體を感じた。彼女は段々苦しくなつた。鳥の鳴聲は益々高くなつて來た。明かに彼女は身體の痛みを感じた。と、一聲高く鳥は鳴いた。彼女は自分が倒れてゐるのだと思つた。そして彼女はじつと四邊を見廻すと、そこは何か暗い部屋のやうであることに氣がついた。何うしたんだらうと思つた。そして、自分は夢でも見たのか知らと思つた。けれども夢にしては餘りに現實であるやうに思はれた。

ふと彼女は自分の片手が何物かを握つてゐるのに氣がついた。それは冷かなあるものであつた。彼女はふとそれは或人の手であると云ふ感じがした。見ると其處にはお良が眠つてゐた。そしてさよ子自身もその側に寝てゐる事が分つた。そしてさよ子の握つてゐるものはお良の手であつた。

「お良さん、お良さん」さよ子は呼んで見たが、返事がなかつた。何と云ふ冷い手だらう。さよ子は急に不安になり出した。

「お良さん」更らに高い聲で呼びながら、その手を揺ぶつて見たが、その手には生氣がなく、固かつた。さよ子はお良の顔を覗き込んで見ると、其の顔は眞青かつた。

さよ子は死の恐怖に襲はれた。お良は死んだのか。彼女の心臓は一時停止したかと思はれた。



けれどもさよ子は自分はまだ夢の中に居るのではないか知らと思つた。さよ子は心を落つかせて、じつと注意深く室内を見廻した。彼女の寝てゐる布團の縞から、疊の一つ一つの目などが凡てさよ子の目に明瞭に映つて來た。そしてお良の青黒い血の氣の無い顔の肌理まで、その閉ぢた目の上に垂れ下つてゐる三筋の後毛まで明に數へられた。

現實か、夢か、いや、夢ではない、現實であると思つたときさよ子は呆然としてしまつた。さよ子は何うしたものが分らなかつた。さよ子は立上つて階段を降りて行つた。それは人を呼ぶ爲めであつた。

「お神さん。歌子さん。お良さんが何うかしましたよ」

けれども、何處にも人は見當らなかつた。

さよ子は通りへ出たけれどもそこにも見當らなかつた。さよ子は再び二階へ上つて來て見た。するとお良は其處に見えなかつた。さよ子は再び驚いた。お良は何處へ行つたらう。女將さんか誰かが連れて行つたのだらうか。あんな大病な或は死んでゐたのか知れないお良が一人で歩く事は出来ない。消えてしまつたのでもあるまい。して見れば自分が通りへ出て行つた後、誰か運んで行つ

たに違ひあるまい。けれども通りへ出たとすれば、自分と行き會ふ譯であるのに、行き會はなかつたのは一體何うした事であらう。

彼女は疲れてゐた。考へるには餘りに疲れてゐた。さよ子は睡眠を欲した。ばつたり布團の上に倒れるとそのまゝ生氣を失つてしまつた。

彼女は誰かの足音で目を覺ました。

太陽は早や高く、室内は目覺めたばかりのさよ子の神経を強く刺戟した。最初は強い光線の爲に來た人が誰であるかは見分けられなかつたが、一瞬後にはそれは歌子であるといふ事が分つた。「まあ、さよ子さん晩かつたね」

歌子はいかゞ云ひながら笑つた。けれどもさよ子は笑はなかつた。彼女の頭にはお良の事が電光のやうに閃いたので、それには答へずに突然聞いた。

「お良さんは、何處へ行つたの？」

歌子はさよ子の調子が餘りに高かつたので、ふつと驚いたやうな表情を見せたが、かう答へた。「私、今朝、遅かつたものですから知りませんが、何でも主婦さんのいふには、主婦さんが



起こさうと思つて上つて見ると、お良さん一人で寝てゐたさうですが、大變顔色が悪かつたのでお  
 醫者さんに連れて行つたさうです」

して見ると昨夜の事は現實であつたかと考へたが、

「その、お醫者さんて何處でせうか」

「さあ、私女將さんに聞かなかつたから知りませんよ」

さよ子は口を閉ぢた。さよ子はそれ以上聞く氣力が無かつた。昨夜體驗した不思議な事を話して  
 見やうかとも思つたけれども、唇が動かなかつた。さよ子の頭はぐんぐん唸つて、目はほんやりと  
 して來た。

「私御飯は戴かないわ。私眠りたいのよ。」

さよ子はかう云ひながら再び布團をかぶつた。

「まあ、どうかしたのですか。何處か悪いの？」

歌子はかう云つたが、さよ子は黙つてゐた。そしてさよ子は不快な氣分の中に眠るともなく眠つ  
 てゐた。

睡眠も彼女の精神を平安にさせなかつた。眠れば眠る程頭は疲れ、痛んで來た。さよ子は時々か  
 すかな叫聲さへ上げた。特に晝頃が一番非道かつたが夕方になるに従つて段々平靜になつて來た。

さよ子は歌子の運んで呉れた夕飯を食べやうとしたが、どうしても咽喉に通らなかつた。さよ子  
 は箸を措いて、又横になつた。外はもう暗くなつてゐた。

軽い足音がするので、さよ子はちよつとその方を見た。

歌子であらうと思つたが、それは女將であつた。今日中顔を見せなかつた女將が上つて來た。さ  
 よ子は直に不快な氣分に包まれたので、何を女將は云ふのであらうかとむかむかしてゐた。

「さよ子さん氣分はどうです」

不思議にもその問ひは非常に優しくかつた。

「いえちよつとばかり」

さよ子は早口にかう云つた。

「實はね、さよ子さん、お父さんが逢ひ度いつて來てゐますよ」

父といふ一語を聞くと彼女は耐へ難き嫌惡の情に襲はれた。



「お父さんが、私達はないつて言つて下さい。ねえ、女將さん」

「まあ、さよ子さん、それが大變なんですよ、非道く悴れてね。病氣なんですよ。さよ子さんに逢つておやりなさい。歩けない位なんです」

女將にかう云はれると、さよ子の心には一種の悲哀に似た感情が起つた。何事であらうか、さよ子は考へた。何事であらうか父が自分に逢ひ度いといふのは。それ程までに弱つた父の會ひ度いといふのを強ひていやだといふ事は出来かかつた。

「女將さん、お父さんは何處に居ますか。私會ひませう」

「さうです會つておやりなさい。此方です。ついでにお出なさい」

女將は先に立つた。さよ子は後をついて歩み出した。

女將は階下へ降りて裏口から出て行くので、さよ子も後をついた。今までさよ子は裏から出られるといふ事は知らなかつた。其處は狭い小路であつた。その狭い小路は眞暗く、一種異様な臭がさよ子の鼻を衝いた。女將の姿は闇に包まれて殆ど見えなかつた。上を向いて見ると僅かに星の光が光つてゐた。二人は此の狭い露路を一町ばかり歩いたが、ふとさよ子は女將の姿がほんやりと明ら

かになつて來たのを感じた。見ると其處は空地であつた。其處には雜草が生い茂り、蟲が鳴いてゐた。女將はその草を踏み分けて進んだ。其處は墓地で石塔が五つ六つ立つてゐた。

さよ子はもうその時から不安になり出した。「一體何處に居るのですか？」と聞かうとすると、其前に女將はかう云つた。

「あそこですよ、今直ぐです」

成程女將の指差した方には小さな土藏作り——暗かつたが多分さうだと思つた——らしい家が有つて、電燈が點いてゐた。

けれどもさよ子は不安であつた。何といふ淋しい處であらう。あそこに父が待つてゐるであらうか。何故あんな淋しい處に居るのか。何故父は用事が有つたらばあの家へ來ないのだ。かう思ふと彼女は自分に危険が迫つて居はしないかと考へられた。

さよ子は注意深く四邊を見廻した。深い闇の中では何物も見分ける事が出来なかつた。けれどもふと左手の石塔の蔭に一箇の黒い物體が竦んでゐるやうであつた。けれどもそれは人間であるか、或は疲れ切つた彼女の錯覺であるか、それは分らなかつた。



だが二人はもうその家の戸口まで来てゐた。  
女將は立止まつてさよ子の方を振向いた。

「さあ、お入りなさい」

けれどもさよ子は入る氣になれなかつた。

「お父さんが居るなら此處へ呼んで下さい」

さよ子は不安に満ちて云つた。

「お父さん!! 誰のお父さん!!」

女將は毒々しげにかう答へた。女將の此の一聲はさよ子の頭を打ちのめした。彼女は四邊を見廻した。すると一箇の眞黒い影が石塔の蔭からす——つと立上つたのを見た。さよ子は逃げやうとした。そしてふつと振向いて見ると、直ぐ後一二間の處には見上るやうな眞黒い大きな影がぬつと突立つてゐた。さよ子は自分が袋の中の鼠であるのに氣がついた。何處かに逃れる道はあるまいかと見廻したが、何處にもなかつた。

「まあ、女將さんは私を何うしやうと云ふの。お父さんは何處に居るの」

さよ子は泣聲で云つたが、女將は嘲笑つた。

「お父さんは何うでもいいさ。さあ御入りなさい。待つてゐる人が有りますよ」

さよ子は、自分が高山に計られたのを知つた。彼女は逃げ出さうと決心した。

「待つてゐる人つて誰なの」さよ子はかう云ひながら右手の方へ逃げ出した。彼女は後から追つて来る黑影の足音を聞いた。次第次第に迫つて来た。そして荒い男の息使ひを聞いた。と彼女は闇の中に光る一筋の河が前方に横はつてゐるのを見た。さよ子は絶望の餘り立止まつた。

と、彼女は後から強い力で抱き締められたのを感じた。彼女は叫んだ。

「誰か来て、助けて下さい!!」

けれどもさよ子の叫び聲は絶えてしまつた。さよ子は自分の口に手拭を詰められたのを感じた。満身に力を入れて抵抗したが駄目であつた。

さよ子は自分の身體が二人の男に依つて擔がれたのを感じた。二人は元へ返へして、その土藏作りの家の中へ運び込んだ。八丈間に彼女は降ろされた。二人の男は去つてしまつた。

何と云ふ残酷な仕打であらうか。さよ子は来る可き運命を豫期して、じつと眼を閉ぢた。逃けら



れるだけ逃げて見やうとさよ子は思った。

さよ子は坐つて室内を見廻した。

天井は低く頑丈に出来てゐた。白壁で窓と云へば東向きに一つ、鐵格子の二尺四方位の、が有るばかりであつた。何處からも出られさうな處が無かつた。

二三十分も経つたらう。ガチガチと戸の鳴る音がして何者か入つて來た。さよ子が其の方へ目を轉すると、其處には高山が立つてゐた。その底知れぬ殘忍さを淋へた目は貪慾で光り、厚い唇には卑劣な微笑を浮べてゐた。

さよ子は憤怒で燃えてゐた。瘠せ衰へた身體はぶるぶると顫へて來た。

「やあ、さよ子さんかね」

高山はかう云つたとき、さよ子は電光のやうに立上つた。

「私を何うしやうと云ふの？ 何うでも出来るならして見なさい!!」  
けれども高山はにやにや笑つてゐた。

「何うしないでさ。さよ子さん、お前さんはもう私のものだよ」

さよ子はすつかり逆上してしまつた。夢中になつて叫んだ。

「畜生!! 乞食奴!!」

さよ子はかう云ひながら戸口の方へ駆け出したが、戸は開かなかつた。

さよ子は自分の肩が恐ろしい強力で抑へられたのに氣がついた。さよ子はよろめいて、ばつたり其處に倒れてしまつた。ふとさよ子は何物かを鼻につけられたのを感じた。それは力強い氣體であつた。その氣體を嗅ぐとさよ子の頭はぐらぐらし、五體はひびれてしまつた。

さよ子はもう何も考へる事が出来なかつた。手も足も動かす事が出来なかつた。たゞ、ほんやりと或物が自分を運んだ、妙にふわふわと浮上つた事を覚えてゐるのみであつた。だがそれが最後であつた。彼女は眞黒い涯てしも無い砂漠の中に溶けて行つた。

さよ子は生氣に返つたとき、それは二時間後であつたか、三時間後であつたか分らなかつたが、彼女は部屋の片隅に投げ出されてゐるのを感じた。室内は電燈を消したのであらう、眞暗だつた。彼女は自分の着物が解けてゐるのを感じた。身體には氣持の悪い汗がびつしよりとついてゐた。



身體全體が腐つて行くかのやうにじめじめしてゐた。そして頭はほんやりと鈍つてゐた。さよ子は公衆の前で裸體にされて辱かしまれたより強い恥を覺えた。彼女の顔は恥辱の爲に眞赤にほてり全身の血は逆上した。

さよ子は無意識でふらふらと立上り、戸口の方へ辿つて行つた。けれども其處は戸口ではなかつた。さよ子はいらいらとしてがりがり爪で柱を掻いた。爪は破れて血は滴り落ちた。けれどもさよ子にはそれ程には感じなかつた。

さよ子は最初辿つた處から左の方へ四五尺廻ると、其處に戸があつた。戸には錠をかつてあつたけれども、さよ子は人間以上の強力を出して押し破つた。彼女は外へ出た。もう明方に近かつたらう。けれども星一つない空は暗かつた。暗らい冷い空氣の中をさよ子は失神したやうにふらふら歩んでゐた。彼女の足には生氣がなかつた。彼女の目には何も見えなかつた。彼女は石に躓いてばかり仆れた。けれどもさよ子は、何時仆れたか何時起きたかなぞといふ考へは浮ばなかつた。熱に浮かされたやうにうつとりとしてゐた。四邊を見廻すと其處には何者も見へなかつた。たゞ暗黒であつた。さよ子は夢中であつた。之から何處へ行かうかなぞと云ふ考は浮ばなかつた。さよ子はよ

ろめきながら歩き、歩きながら躓いて仆れた。そして無意識に前へ前へと進むばかりであつた。

彼女の心は何に對しても動かなかつた。たゞ大なる失望と大なる恥辱のみであつた。どうでも成るやうに成ればよい、私は生きる事を欲しない。彼女の炎のやうな頭は呪つてゐた。凡てのものは滅亡するが可い。凡てのものは腐敗するが可い。私の身體は腐つてしまつた。私は生きながら屍である。彼女は大なる失望の爲に氣も狂はんばかりである。跣足の彼女の足からは血が滲み出た。彼女の着物は破れて來た。けれども彼女にはそんな事は分らなかつた。

彼女がふらふらと前へ進んで行くと突然彼女は何物にか突き當つた。彼女はそれを見上ると、それは此の墓地に生えてゐる一本の松の大木であつた。早や百年も、それ以上にもなるであらうか、それは大蛇の鎌首を上げたやうに見えた。そして地から一丈許りの所には南に一木太い枝が出てゐた。

さよ子はそれを見つめてゐると、いや見つめると云ふより引つけられたのであるが、不思議な誘惑が起つて來た。あの枝、あの枝で自分が死ねば自分の凡ては終になる。自分の死と共に自分の受けた恥辱も、凡てのものは亡びてしまふ。かう思ふと彼女はすつと自分の帯をその枝に懸けた。帯



はその枝に丁度よく絡まつた。さよ子はその下に下つた端を結び合せた。

さよ子はそれに懸からうとした時に不思議な冷靜がさよ子の胸に起つた。それは不思議な靜けさであつた。世の中のありとあらゆるものが凡て彼女の胸に解け込むやうな靜けさであつた。ふと、さよ子は哲雄の顔を目の前に見た。明瞭に、明瞭に彼女にはそれが見られた。

「哲雄さん!!」

さよ子は呼んだ。彼女は死なうとした。けれども彼女は自分の腹部に動く肉塊を感じた。と彼女の、凡ての母性にある最も強い、ある本能が動き出した。

「お前はその子を殺さうとするのか」

何者かが彼女に聞いたやうに思はれた。

忽ち彼女の胸には恐しい争闘が起つた。

死すべきか。此の子を殺して死すべきか。或は恥辱を忍んで生く可きか。それは恐しい争闘であつた。

「お、どうして私が此の子を殺す事が出来ませう」

さよ子は叫んだ。

かう叫ぶと同時に彼女は自分の足ががっくりとして前へのめつたのを感じた。が、それより後の事は凡て不明瞭であつた。

(大正十年六月一日起稿——絶筆)



大正十一年五月廿三日印  
大正十一年五月廿六日發

行刷

製複許不

典 附

【定價金壹圓八拾錢】

編輯者 東京府下荏原郡大崎町字上大崎 三九二 赤澤義人

印刷者 東京市牛込區東五軒町四十番地 森田愛介

印刷所 東京市牛込區東五軒町四十番地 東文堂印刷所

發行所

東京市神田區小川町  
(振替東京四七七八八番)

大明堂書店



189  
117



終

